

特216

632

花乃女王  
蓄薇栽培秘法

6  
7  
8  
9  
30  
1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
4

始



特216  
632



王女乃花

法秘培栽薇蓄





元(下) 陽赤(中) 孟賞(上)

花の  
女王 薔薇栽培秘法目次

第一章 緒論

一、東西人の薔薇観

トーマス、ムーアの詩——許六の文——花の王と毒婦——園藝と薔薇

二、英國の國華

各國國花——薔薇戦争——ヨークランカスターローズ——ゼ、ローズ、オブ、イングランド

三、神の花——紅薔薇

西歐の口碑——紅薔薇の由来——愛と戀

四、薔薇祭

ローマとベニス——タコマ市の薔薇祭——薔薇の女神

五、花言葉 ..... 七

ランゲージ、オブ、フラワー——薔薇の花詞

第二章 種類 ..... 一一

一、薔薇の起原 ..... 一一

薔薇と金髪美人——薔薇の原産地——栽培沿革——薔薇の戸籍調査

二、薔薇属の種類 ..... 一二

學名——和名——漢名

三、薔薇の種類別 ..... 一四

一季咲種——四季咲種——蔓性夏咲種——叢性夏咲種——蔓性秋咲種——非蔓性秋咲種

四、薔薇の品種 ..... 一六

品目二百餘種

第三章 園養法 ..... 三二

一、氣候及土質 ..... 三二

二、花園の設置 ..... 三三

場所の選定——床の構造

三、栽植の方法 ..... 三四

栽植の時季——栽植の方法——防害保護

四、肥料の種類 ..... 三五

堆肥——油粕——米糠——乾鰯——過磷酸石灰——牛糞豚糞

第四章 盆養法 ..... 三七

一、盆栽の眞味 ..... 三七

大自然の縮圖

二、培土（種土） ..... 三九

盆栽用土の調製法——種土の作製實驗談

四

三、植木鉢……………四〇

瓦鉢——裝飾盆——鉢の深淺と樹の生育——鉢の大小と樹の體裁  
——鉢の色と花の色——青苔と白砂

四、盆栽肥料……………四三

水肥の製法

五、盆栽棚……………四四

場所——作り方

六、陳列法……………四四

調和の美——配置の美——趣味の高雅俗

七、素人盆養法……………四六

シュインド博士の發表

第五章 移植法……………四七

一、移植の時季……………四七

移植の適季——移植の天候

二、鉢より鉢へ……………四八

盆栽より盆栽へ移植の場合

三、園より鉢へ……………五〇

地植より盆裡へ移植の場合

四、鉢より園へ……………五一

盆栽より園地へ移植の場合

五、注意條項……………五一

六要項

第六章 繁殖法……………五三

一、繁殖法の種類……………五三

繁殖の目的——實生——株分——壓條——挿木——接木

五

二、挿木法……………五三

挿木の季節——挿木床——挿穂——施肥——挿木鉢——適種——  
注意

六

三、接木法……………五七

接木の種別——接木の時季——砧木——砧木養成——砧木の種類  
切接法——囊接法——芽接法——接木用具——接木用品

四、實生法……………六七

實生の目的——播種法——人工媒助法

第七章 手入法……………七〇

一、剪枝法……………七〇

剪枝の目的——剪枝季——剪枝部——蔓生種の剪枝——盆栽の剪  
枝——剪枝用品具

二、灌水法……………七二

灌水用の水——水の温度——灌水の量——灌水の度数——灌水の  
標準

三、手入一班……………七五

人間の弱點——不斷の手入——表土の耕勸——砧芽を缺くこと——  
——水肥を施すこと——灌水法——花を切る事——蕾の摘除——施  
肥の困難

第八章 仕立方……………七九

一、歐米式……………八〇

標準式——柱狀式——上昇式——叢生式

二、日本式……………八二

如意式——長幹式——短幹式

第九章 驅蟲法……………八三

一、 害蟲の習性及防除法……………八四

綠蚜蟲——菊ト唇——鵝花娘子——姬黒落し文——貝殻蟲——  
ウメケムシ——カナブレ——ウンカ

二、 驅除藥調製法……………八六

石油乳劑——松脂合劑——除蟲菊浸出液——石鹼水

第十章 治病法……………九〇

一、 病原及防除法……………九一

病徴及病原——豫防及驅除

二、 驅除劑製法……………九二

ボルドウ液

### 附 録

世界薔薇觀……………九七

全世界を包む花——波斯の花——舊約聖書の花——戀愛の花——羅馬  
の花——贅澤の花——羅甸文學の花——薔薇と紅顔——薔薇と少女——  
——薔薇と英國——薔薇と沙翁——薔薇と宗教——薔薇と人生——薔薇  
と清國——醜態とは何物——薔薇と醜態——清國も薔薇の中心——薔  
薇と漢詩——長春花——宋時代に始まる——薔薇と日本——過去に薔  
薇なし……………一二二



花の薔薇栽培秘法  
女王

第一章 緒言

一、東西人の薔薇観

花いばら いとゞ美はし

その昔 琥珀の雨に ぬらされて

花いばら いとゞ愛らし

森の女神か ほゞ笑む春の 愛兒か

花咲かす 春を呼びつゝ

歌はなん かゞやく薔薇よ 汝が爲め

花の花

かゞやく薔薇

なれが香は

神のみやゐに

かよふらん

薔薇の花

送るかほりは

苦痛に

なやめる胸を

静むなれ

墓の

上を守りては

果敢なくも

朽ち行く跡を

弔らふか

斯くてぞ

時の経めぐりて

秋風に

色あせさりて

凋むとも

いみじくも

二人のまゝに

香を送る

色はかへじな

死にもこそ

(トーマス、ムリア)

長春 薔薇のたぐひは紅白うつくしく粧ひたるには似たれども元來いやしき花の殊にさかり

久しきこそうたてけれ、例へば總家と云へる辻君の日の暮るゝを待ちかね、世上に徘徊し物心  
覺えてより、其流を立て、五十に近き頃まで振袖を着し始めもなく終りもなきこそ、うるさけ  
れ。  
(許六「百花譜」の一節)

以上東西兩詩人の薔薇觀を讀んで、余は先づそが對照の妙奇と、感想の差異に驚かざるを得ぬ  
何が故にかくも一は讚美し一は酷評するであらうか、右の二篇が直に東西人薔薇觀の代表的感想  
だとは思はないが、少くとも古來泰歐の人士が、或は「花の王」「花の中の花」又は「花の女王」  
とまで激賞し美辭を聯ねて謠歌するに反し、わが國人の多數は花底に刺を藏し笑を含んで毒を獎  
むること、尙彼の毒婦の美なるに比して、此の薔薇の花容香芬を顧みない、否寧ろ嫌忌し來たつ  
たかの觀あるは争ふ可らざる事實である、尤も上古に於ては、今日の如き豊艶富麗なる珍種佳品  
のなかつたことも、日本人の薔薇に對する審美心の貧弱であつた一因と見ることが出來やう、し  
て見れば當時に於ける俳人許六の酷評も亦無理からぬこととも思はれる。  
然るに近時泰西の俗東漸するに及び、又園藝の趣味普及し花卉栽培熱流行するに至り、昨日ま  
で毒婦に擬せられ、辻姫とまで卑められて居た、薔薇は、世の嗜好に投じ人の美感を牽き、俄然

として名聲を揚げ、その馥郁たる薫香と、嫵媚たる艷容とは、忽ち花中の霸王を以て目せらるゝに至つた、花若し靈あらば、その天性の眞價を發揮するの時運に遭會するを得たることを喜ぶと共に、又退いては古今風潮の變遷、人間性情の反覆、榮枯盛衰の理、運命の不可解なるに想到して多大の感なきを得ないであらう。

そは兎もあれ、余輩は今順次に薔薇の培養法一斑を説くに當り、先づ本冊子の初頭に於て、少しく此の花に關する神話傳説等の趣味あるものを紹介しておきたいと思ふ。

### 二、英國の國華

各國には各々國華と云ふものがある、十六片の菊花が長くもわが皇室の御紋章であり、旭に匂ふと歌はれた櫻の花が、武士道の權化として殆ど日本の國花とも云ふべきことは、何人も熟知せる所であるが、之と同じく、獨逸では矢車草、西班牙ではオレンヂ、印度は撫子、埃及は蓮、波斯はチューリップ、希臘は橄欖、秘露はヒマハリ、伊太利は雛菊、佛蘭西は花菖蒲又は百合、羅馬は月桂樹等を國の標章として居る。英國の國華は、クイン、オブ、フラワーと稱せらるゝ薔薇即ちそれである、而してその國華と制定せらるゝに至つたに就ては、茲に一場の有名なるロー

マンスがある。

世界史を繙いた人は、古代英國に於て、所謂薔薇戰爭と稱せらるゝ最も風流(?)な内亂のあつたことを知らぬものはあるまい、これは我國で云へば丁度源平の二家が、紅白の旗印を樹て、相争つたのと同じで、ヨークとランカスターの二家が、白と紅との薔薇の花を胸に挿して、互に相戦つたと云ふ歴史上餘程趣味のある噺として後世まで傳つて居るが、幸に其の戰爭は永續せず、後ヨーク家のエリザベス女皇とランカスター家のヘンリー七世とが和婚せられて、現在の大英國の祖先は成立した、そして薔薇の花で赤に白の斑入のものをヨークラスカスターローズと命名して、遂に皇室の御紋章となすに至つたと云ふ。

又纖弱き女性の身に在し乍ら、所謂太陽の没することなき大英國に君臨ましまし、十九世紀に於ける名君主であつたヴィクトリヤ女皇の、御年未だ若き折を此の薔薇に例へまつりて、國民はゼ、ローズ、オブ、イングランドと謳ふたと聞く何處までも英國と薔薇とは離る可らざる深き因縁があるものと云はねばならぬ。

### 三、神の花——紅薔薇

西歐の口碑によれば、薔薇の花は愛の神キューピットと美の女神ヴィナスの神の花と云つて、  
歡樂、愛情、智識の三者を標章して居ると傳へられて居る、而して昔は皆白花ばかりであつた  
が、或時天上に於て諸々の神々、雲上の一堂に會合ありて酒宴を開かせ給ひし折、如何なる誤ち  
であつたか、愛神キューピットは傍にありし酒の壺を覆し給ふた、するとその神酒の點滴が、時  
しも爛熳と咲き亂れてをつた下界の白薔薇の花上に滴り落ちたと、見る間に怪しむべし、今まで  
純白の花片は忽ち紅燃ゆるが如き色に變つて了つた、これが世上に紅薔薇の咲き出づるやうに  
なつた起因である——。

愛の神がこぼし給ひし酒の雫によりて染められし花——純白より眞紅に——さればこそ薔薇の  
花詞は皆愛と戀との寓意に用ひらるゝ誠に故ある哉と手を拍つものは強ち若き人達ばかりではあ  
るまい。

#### 四、薔薇祭——薔薇の女神

薔薇祭と云ふのは、その昔伊太利のローマ及びベニスに於て、花の神を祭る爲めに、薔薇其の  
他の花を以て、我國の花車の如きものを飾り、幾日かを歌舞音曲に暮らしたと云ふ其の遺習が今

日まで残つて、伊太利、西班牙等を初め、其の他の國々でも、晩春五月の交、薔薇の花の盛り  
を期して行はれつゝある西洋年中行事の一である、特に米國の西部は氣候も温和で、四季絶えず  
花が咲き亂れて居るので、天帝や花神に向つて人生の幸福を感謝する爲め、ワシントン洲のタコ  
マ市では、毎年五月盛大なる薔薇祭が行はれて居る。

今此の盛典の一端を聞くに、祭期中第二、第三、第四の三日間を本祭と稱し、その當日市民は  
皆、各自の門戸、家屋馬車等總て薔薇の花を以て裝飾し、又その市中より妙齡花を欺くばかりの  
美少女數人を選出し、尙も其中より一美人を選びて、此の少女の全身を花を以て美々しく飾り、  
花の女王即ち薔薇の女神と稱へる、かくて薔薇の女神は他の美少女數名を隨えて市民より花の冠  
を戴く式が行はれる、其の盛大美觀壯麗雑踏の光景は、到底實況を目撃した人でなければ想像も  
及ばぬ、一言以て其の景情の一端を髮髻せしめんと欲せば「全市只これ薔薇の花」と云ふより外  
に適當の形容詞なしとの事である。

#### 五、花 言 葉

太田道灌と山吹の故事は云はずもがな、一輪の花によりて、無言の裡に、無言の情趣言外の

意味を通ずるは、古來歐米の社交界、特に若き男女間に於て流行せられて居つて優美なる交際術の一つである、ランゲージ、オブ、フラワー乃ち花言葉はもと詩人の感想より出でたるものと稱せられて居るが、それは兎も角、面白き研究の結果として何人も一通り心得置くのも強ち無益の業ではあるまい、但し茲には薔薇の花が如何なる意味を寓する花詞に用ひらるゝかの概略を述べて見やうと思ふ。

昔羅馬人は、薔薇を以て喜悅の記號としたが、後に至つて愛の標章とするやうになつたとはシゴルニーの詩にも歌つてあるが、現今薔薇は一般に「美」を意味するものとせられて居る、併し又同じ薔薇の中でも色、花、蕾、その他によりて多少の意味を異にする、即ち

- 白花のものは 余は汝に對して相當の人物なりとの意
- 紅花のものは 美しくしき愛を表す
- 黄花のものは 愛の衰へ行く意
- 白花の凋れたるものは 時の間の印象の意あり
- 白花の芽は 少女らしき意を有す
- 紅花の芽は 純白及び愛を表はす

薔は 少女心の可憐さを意味す

又花束の作り方に依つて種々の意味を寓するに至る、即ち

- 紅花の花束は 恥しさと云ふ意味
- 黄花の花束は 嫉妬
- 白花と紅花を合せしものは 一致和合
- 一重咲のものは 質朴

薔薇の花を倒にして出せば 「否」

此他満開の花を二個の蕾の上に置き添ふれば「事の秘密」を意味し、草束に此の花一輪を以てすれば「欲するものを友より得ん」との花詞となる等尙種々の趣ある寓意あれども、之等を詳記するは本書の目的でないから以下省略することにす、尙花言葉の詳細に就ては、別に一冊子を編み、他日を期して公刊する考である。

花咲き初めし折にこそ

薔薇の花は極みなれ

恐れ雲の絶間より

もれて希望は輝ける

朝の露のおきそえて

香こそますらめ薔薇の花

涙の珠に飾られて

戀こそいとど戀しけれ

汝が色香のゆかしさに

その一枝を花ながら

折てかざさむやよ野薔薇

幾年月の霜を経む

戀と希望のしるしにて

(スコット「湖上の佳人」一節)

## 第二章 種類

### 一、薔薇の起源

薔薇！此一語は直に人をして濃艶、豊麗、佳香を聯想せしめ、又直に明眸皓齒の美姫麗人を胸裡に描出せしむるであらう、然りげに薔薇は「美」の標象である、わが輩一流の擬人法を以てすれば、蛾眉細腰、媚々たる日本婦人を此の花に比せんは當らず、正に容姿華麗、香薰馥郁たる西歐の金髪少女に擬してこそ、有情の花と非情の花兩々相對して尤もふさはしきものであらうと思ふ、宜なるかな、或は卓上の珍となし、或は襟に指し髪に裝り、熱しては紅唇に當て、温き接吻を與ふるなど、愛翫賞美宛然戀人を見るが如くである、これ原産地は亞細亞なりてふ學者の説略一致せるにも拘らず今日培養種の最良品を産するは、東洋にあらずして歐洲——特に英米二國を推さざる可らざる所以である。

古昔記録なき時代に於てすら、詩人は既に薔薇の美を謳歌して居る事實より推察すれば、如何に其の起源が古く、又栽培も隆盛であつたかの一端を視知することが出来やう、爾來幾百年、世

の愛好家は、年々品種の改善に意を注ぎ、新珍奇異なる所謂繚種なるもの、育成に努めた結果、今日にてはその品種實に數千の多きを算するに至つた、特に晩近四五十年間に於ける薔薇栽培の進歩發達の著しきは、實に驚くべきものがある。

本章に於ては主として薔薇の種別及び今日世上に賞美せられつゝある培養變種の大略を擧げて同好者の參考に供する考であるが、それに先ちて、聊か此の花の戸籍調査をしておく必要があると思ふ。

一、薔薇屬の種類

左に掲ぐるは日本に現存せる薔薇屬の種類である。(柚木規雄氏の著書より抄録)

學 名	和 名	漢 名
Rose Multiflora Thunb	のらばら	野 薔 薇
Rose Rugosa, Thunb	はまなす	玫 瑰
Rose Bonksiae, R. B	もくこうばら	木 香 花
Rose Indica, L	かうしんばら	月季花、長春月々紅
Rose Laevigata, Wich	なにはいばら又せかいばら	金櫻子、南絡子刺梨子
Rose Micro, Shylla, Rokb	さんせうばら又いざよいばら	十六夜月繚絲花
Rose Var Plantaglyphlla, Roel	こやばら又ほさついばら	十 姉 妹
Rose Lemperivrens, Linn	ぼたんいばら	佛見笑問々紅寶相花
Rosa Aegipharis, Linell	たかねばら	—
Rose Moselata Mill	やまいばら	—
Rosa Ludae, Fret Koch	はひいばら又はまいばら	—
Rosa Wichuriana, Cresp	てりはのいばら	—

Rose Brechtata, Wendl. かゝやんばら  
右に列擧したものの中には、日本在來の野生もあり、又既に栽培せらるゝ所のものもあり、外國より舶來したのも交つて居る。

### 三、薔薇の種別

學術上の分類は別として、實際栽培上の區別としては、盆栽用、庭園用、挿花用の三區位にするか、又は一年間に開花する回数の差異に依つて區分した方が實用上適當の種別法ではあるまいかとの説もあるが未だ此の説は一般に用ひられて居ないから、之を詳述することが出来ぬ、故に茲には従來西歐の栽培家によりて行はれて來た種別法の概略を述ぶることとする。

第一、一季咲種（夏咲種）サンマルローズと稱せらるゝもので、一年只一回初夏の候に開花する夏咲種である。

第二、四季咲種（常咲種）ムーベチニアルスと稱せらるゝもので周年殆ど間斷なく開花する所謂四季薔薇である。

以上の二種を更に各二種宛に細別する、即ち

#### 二季咲種

- (A) 蔓性夏咲種
- (B) 叢性夏咲種

#### 四季咲種

- (A) 蔓性秋咲種
- (B) 非蔓性秋咲種

但し茲に秋咲と云ふのは春より秋にかけて咲き續ける四季咲の別名であつて決して秋にのみ開花する特別種ではない。

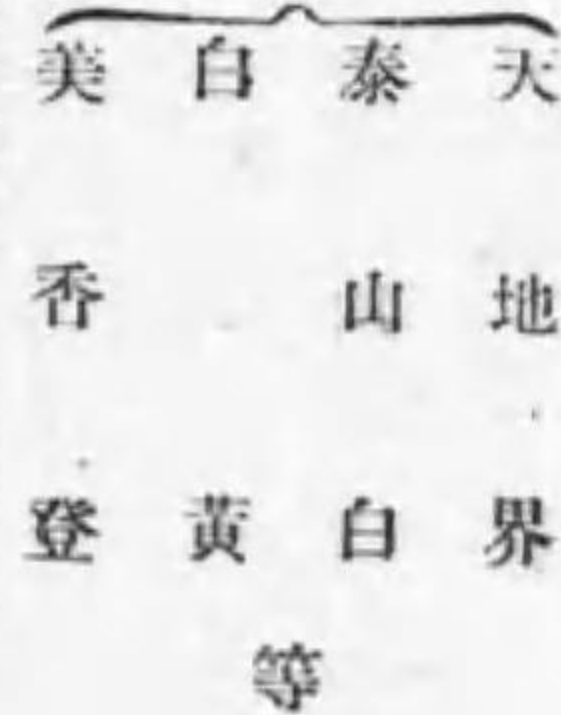
大體の區別は以上の通りであるが、余は尙稍精細に且つ一目瞭然たらしめんが爲め重複を顧みず左に之を表示しておく。

- |      |       |      |
|------|-------|------|
| 一季咲種 | 蔓性夏咲種 | 野薔薇等 |
|      | 木香薔薇等 |      |
|      | 叢性夏咲種 | 金世界等 |
|      | 金司香等  |      |
|      | 蔓性秋咲種 | 大山吹等 |
|      | 山椒薔薇等 |      |



四季咲種

非蔓性秋咲種



尚終りに余輩の愚見を附記すれば學理上又は慣習上斯く區別はしてあるもの、培養管理の如何に依りては、四季咲も一季咲となり、之に反して一季咲も四季咲となすことが出来ると思ふ故に此等の種別も絶對不易のものではない、學者、培養家が便宜上の區別分類と見るのが至當であらう。

四、薔薇の品種

栽培の起源古く、又分布區域廣く、多、益々世人の愛好を買ひ、需要増大しつゝある薔薇が、一年一年その種類の殖えて行くのは自然の趨勢である、今日世界に於ける薔薇の品種は暫らく措いて問はず、我國に於て現に培養せられつゝあるものばかりでも、千を以て數ふと云ふ。

今之等の總てを擧げて花姿香馥の詳細を述ぶることは、到底此の冊子の紙面が許るさな、乃

ち茲には其の最も著名で且つ普通的なるもの二百餘種を選び、花瓣の大小、芳香の多少色彩の如何、其の他の特性に就て、品名の下に簡單なる解説を試みやうと思ふ。

薔薇品目

- 榮 冠 本性種葉は稍光澤あり丸形劍葉花色は比類なき鮮なる濃金銅色に薔端丹朱紅大覆輪掛けに咲出し花脚は八重咲香氣高く大々輪其の特異の色彩は洵爛大に人目を引く
- 華 陽 樹性細立木性葉は細形線色白味あり花色は咲出し丹朱紅掛け満開後淡き鮮紫紅色に裏古金色を呈し最も氣品ある八重咲香有大々輪
- 白 徽 章 純木性葉は細形劍葉にして長蕾花色は極白色にて花芯高く千重咲香有大々輪殊に強健花附多く開花能く永を保つ白色薔薇の新種として推賞せらる
- 蘭 陵 性は木性葉は稍丸形花色は咲出し古金色の地に紫ぼかし覆輪掛にて半開後金銅色となり初瓣網様の筋入最香有八重咲大々輪花色の異彩ある殊に賞せらる
- 丹 山 強健なる木性葉は丸形厚く花色は鮮なる黒紅色にして光澤あり花瓣は厚く廣形八重咲香有最大輪樹性殊に強し
- 世 界 一 (Mabel Morse) 木性葉は頗る光澤に富み花色は澄んだ濃黃色にて輝あり其黄の色は未だ曾て世界が見ないとの稱ある名花にて最も香氣に富む八重咲大々輪
- 愛 國 (Shet Silk) 葉は光澤ある劍形葉樹性強く花容は最も良好なる劍形受咲花色は咲初め赤銅色を帶滿開鮮なる珊瑚紅色にて花輪の底部古金色を呈し芳香に富む八重咲最大輪佳麗賞せらる
- 錦 裳 (Gwyneth Jones) 葉は光澤に富み花色は洋紅オレンジを含みたる濃緋紅色にて底部は古金色深く八重咲大々輪花色の燦然たる頗る愛賞せらる
- 春 洋 (Mabel Turner) 葉は平形大葉花色は表白裏淡桃色にて底黃帯花容廣平瓣劍形八重咲最大々輪樹性殊に強健花壇植にも好適す

法 秘 培 栽 薇 薔

- 沖 煙 火  
葉は光澤ある黒緑色花色は銅色を帯たる照紅色底部極黄色にて香有三四重咲大輪半開狂形満開より筒形となり最も珍奇なる花容を呈す。
- 香 蘭  
木性枝掛け多く光澤ある丸形葉樹葉赤味あり花色は輝しき濃黄色に橙色を含み花容良好長帯にて剣形八重咲芳香殊に強烈なる大々輪花附能く樹性強く良質を備えたる優種にして殊に愛賞せらる。
- 綾 織  
(Mrs. C. W. Edwards)  
樹性強く葉は丸形黒緑色光澤あり美しく花色は洋紅色に基部黄色を帯花容丸形抱受咲八重香有大々輪花色の美賞讃せらる。
- 光 風  
木性葉は平形葉葉脈赤の筋入花色は淡き橙黄色に茶を帯び平形八重咲香有大々輪
- 連 鶴  
葉は青緑色長形剣葉花色は底に青味ある乳白色にして花容剣形咲花芯高く最も良好なる千重咲香有最大輪。
- 英 雄  
(June Boyd)  
樹性強健にして花附能く葉は最光澤ある黒緑色花色は咲出し洋紅色銅色を含み花輪の基部黄色にて花莖強く花莖の外部琥珀色を帯満開品位ある濃桃色のぼかしを呈す八重咲大々輪最も強健にして鉢植花壇植とも好適し自由に成育す。
- 順 風  
(Gwynne Carr)  
樹性強く葉は淡緑色花色は鮮なる櫻桃色に底古金を帯花容端麗他種に優り芳香頗る高く平形八重咲咲の大々輪最も氣品に富む優種たり。
- 元 旦  
(Mrs. Wm. Sargent)  
花色は白地へ杏桃色で強き石竹色が底より御端へ覆輪ばかり美しく花容も殊に良好にて花壇植にも好適の九重咲最も大々輪樹性強き優種たり。
- 長 良 川  
(Lord Allenby)  
性は木性葉は丸形大葉白色を帯びたる淡緑色花色は濃黒紅色に赤色が漲つて美しく花容は満開狂亂咲花芯高く上品なる八重咲最大輪。
- 舞 衣  
(Hawthorn Scarlet)  
花色は銀々緋にして麗しく花輪は最大ならざるも花附多く樹性又強健にて成育易く八重咲大々輪花色の佳麗賞せらる。
- 朝 比 奈  
(Lady Roundway)  
性は木性葉は稍光澤ある丸形剣葉枝掛多く花色は深き銅紅色に黄を帯剣形抱八重咲香有大々輪。
- 錦 孔 雀  
(Ruth)  
葉は光澤ある長形葉花色は橙黄色へ洋紅覆輪掛美しく花容丸形咲出し剣形八重香有大々輪花色鮮麗愛賞せらる。

法 秘 培 栽 薇 薔

- 鳳 城  
性は木性葉は丸形剣葉花色は頗る光澤ある天鵝絨狀の黒緋紅色花容廣瓣抱形咲八重最大輪芳香殊に高く開花永きを保つ。
- 賞 盃  
(Mrs. Beckwith)  
性は木性葉は光澤に富み丸形長葉花色はレモン黄色にして底銅黄色を帯ぶ長瓣剣形受咲八重大々輪花容良好の一種にて芳香最も高し。
- 金 月  
(Ariel)  
葉は青緑色平形葉花色は比類なき光澤ある金橙色にて芳香あり花容剣形咲出し平形八重咲大々輪樹性最も強し。
- 春 光  
性強健木性成育易く花色は鮮なる銀桃色濃淡なく花容丸瓣平形盛咲八重最大々輪芳香最も高く花壇植にも好適す。
- 北 斗 星  
樹性木性刺毛多く光澤葉にして花色は丹朱黄を含み咲出し黄糸覆輪平形満開狂よれ咲き底極黄にて纏色せず八重咲大々輪栽培注意を要す。
- 赤 陽  
強健なる木性容易に成育し花色は黄を含みたる濃紅特異なる色彩あり盛形咲八重咲最大輪最も麗しき一種たり。
- 花 笠  
樹性最も強健にして成育易く葉は光澤ある丸形長葉花色は鮮桃色抱形咲出し中央黄帶満開狂形八重咲香有最大々輪。
- 炎 の 舞  
(Independence Day)  
木性光澤ある長形丸葉花色は橙色に紅色を含み花輪は多からざる八重平咲大々輪花色特異の色彩は大に賞せらる。
- 暮 春  
純木性強健なる一種にして花蕾銅色黄を帯咲出し満開後表肉色裏薄時色八重香有剣形最大輪花壇植とし容易に繁茂す。
- 女 王  
(The Queen Alexandra)  
木性にて葉は頗る光澤ある青葉花色は表濃朱紅色にして花輪の裏は古金色を呈し丸瓣抱形に咲出し満開狂八重咲大々輪其花色の燦然たる大に人目を引く。
- 金 太 閣  
(La Joconde)  
葉は青緑色丸形小葉樹性枝掛け多く花色は黄金黄色花輪は細瓣菊形外側は丸瓣千重咲大々輪太閣の黄花なり。
- 翁 島  
強健なる木性種成育易く葉は丸形厚葉花色は白色に中心青黄味を帯廣瓣八重咲香有最大輪鉢植花壇とも適す。
- 初 瀬  
性は頗る強健なる枝立木性刺毛多く葉は黄緑色長形厚葉花色は濃朱桃色厚瓣剣形咲花莖強く受咲最大輪。

法 秘 培 栽 薇 薔

- ◎蓬 菜 山
- ◎月 の 桂
- ◎日 の 丸
- ◎満 天 の 篝
- ◎寶 冠
- ◎八 州
- ◎待 霄
- ◎古 金 欄
- ◎山 里
- ◎金 嶺
- ◎神 路 山
- ◎金 糸 鳥
- ◎雛 祭
- ◎金 賞

葉は厚く稍赤味あり花色は肉色に杏色を帯たる奇色咲出し橙色の網の如きばかり剣形瓣平咲八重香有  
大々輪。

樹性強く葉は丸形平葉花色は極白色にして品位に富み外瓣は剣形内丸形抱咲花形殊に良好なる剣形咲  
中心に淡黄を含ま吹千重の最大輪白花の優種たり。

樹性強き木性花色は濃緋紅色にして鮮麗なる丸形吹八重大々輪天鵞絨状の光澤あり頗る芳香に富み花  
輪數多を開く一種たり。

性は叢木性丸形葉花色は濃橙色に銅色を帯廣瓣平形八重咲香有大々輪色彩麗しく賞せらる。

樹性殊に強く葉は厚形丸葉にて花色は黄帯たる淡紅色基部白色を呈し形状剣形に咲出づ満開狂咲八重  
最大輪。

木性葉は青綠色花色は古金色に瓣端紅掛け千重最大輪花容良好なり。

光澤ある長形葉花色は橙色を帯たる乳白色にして口紅掛け厚廣瓣剣形八重受咲の最大輪。

叢木性にして花色は濃紅色に暗紅色を含み廣丸瓣中抱咲香有八重最大輪。

花色は薄肉色にして花輪の中央は象牙色の黄色を含み花瓣は剣形廣瓣盛咲八重最大輪。

(Golden Emblem) 木性にして葉は光澤に富み花色は常に鮮なる口紅かけ半開後純黄濃色にして香  
葉は光澤ある丸形葉花色は極めて濃き輝色にて丸抱形千重咲の最大々輪。

純木性花色は淡き橙黄色にして光澤に富み芳香あり花形殊に良好なる剣形咲中心高く満開よれ剣瓣咲  
最大輪。

樹性強健にして容易に成長す花色は濃緋紅色にして半八重咲天鵞絨様の光澤あり花瓣は廣瓣平咲の最  
大輪。

木性花色はオレンジ色に少しく杏色を含みたる黄色にして花弁は長く光澤あり満開狂よれ咲八重大々  
輪豊富なる佳香愛賞せらる。

法 秘 培 栽 薇 薔

- ◎湖 畔
- ◎吳 春
- ◎花 筏
- ◎華 山 島
- ◎金 光 籠
- ◎都 の 春
- ◎菊 水
- ◎住 の 江
- ◎迎 春
- ◎亞 細 亞
- ◎山 科
- ◎金 堂
- ◎喜 撰

性は木性葉は長形大葉花色は白地に黄を帯び中心は上品なる櫻色を呈す花蕾は長く平瓣抱形咲八重大  
々輪氣品高く絶妙なり。

(Columbia) 強健なる純木性葉は濃綠色丸形劍葉花色は鮮紅色覆輪の如くに紅色を掛け花輪底部白色  
を呈し自由に成育する最香氣ある八重最大々輪花色は鮮麗極む。

純木性葉は丸形厚く花色はバラ色ばかり地に花輪の底部より黄色を含み丸形瓣重き八重咲満開盛形咲  
の大々輪容易に栽培せらる一種たり。

葉は濃綠色花色は比類なき濃緋紅色にして燃ゆるが如き色合にて天鵞絨状光澤あり八重香有大々輪成  
育易からず。

最光澤ある長形葉花色は卵黄色にして鮮麗長瓣八重満開銅色を帯大々輪。

(Los Angeles) 杏黄を帯たる桃紅色中心黄色を含み剣形八重の最大輪花色の麗麗花容良好なる殊に  
愛賞せらる。

木性葉は頗る光澤ある丸形葉花色は咲出し鮮黄色にして平形八重咲大々輪。

純木性花色は黒天鵞絨状の濃緋紅色平咲八重大々輪。

強健なる木性葉は平形にて蕾は長く花色は淡き珊瑚様の紅に底部より鮮なる黄色を呈し花瓣廣く剣形  
八重咲最大輪花容豊麗なり。

純木性葉は丸形劍葉厚くして稍赤味あり花色は櫻色へ花輪の基部より全面へ古金色を呈し瓣端鮮なる  
紅色をほかし剣形盛咲八重香有最大輪稀品。

木性葉は稍丸形光澤あり花色は瓣端櫻色にて中央濃橙黄色に紅色を含み健瓣平咲形八重香有の最大輪  
花色の麗しさは大に八目を引く。

樹葉は赤綠色長形葉光澤あり花色は比類なき金輝色最も芳香に富む八重咲最大輪。

木性葉は丸形平葉花色は珊瑚様の鮮桃色花容剣形良好にて最も芳香高く千重受咲最大輪。

法 秘 培 栽 薇 薔

- ◎花 祭
- ◎文 鳥
- ◎雷 光
- ◎隴 月
- ◎白 扇
- ◎花 珊 瑚
- ◎太 閤
- ◎麟 鳳
- ◎鏡 の 袖
- ◎大 王
- ◎水 晶 閣
- ◎旭 の 峯
- ◎宿 彌

純木性殊に花附能く花色は表裏なき鮮紅色底黄を帯平形八重満開狂剣咲最も鮮麗を極む大々輪。  
 木性枝立花色は薄櫻底黄にて中心濃く鮮紅色の覆輪掛最も美しく剣形廣瓣八重咲香有最大々輪華麗なる優種たり。  
 性強健花色は黒濃紅にて天鷲絨様の光澤あり殊に秋季は本質の麗しき色彩と花容狂咲に開す八重咲最大輪。  
 葉は丸形大葉花色は品位ある肉色にて濃淡なく花容豊麗剣形の最良好に咲出し八重受咲の大々輪。  
 性は強健なる叢木性葉は平形青葉花色は雪白色にて花瓣は丸形抱蓮花咲八重受咲の大々輪。  
 木性葉は丸形厚く光澤あり花色は珊瑚様の鮮なる淡紅色底黄を帯び健瓣抱丸形玉咲八重最大々輪殊に開花永く保ち芳香の強烈なる薔薇中優逸なる一種たり。  
 純木性花色は銅色オレンジに黄と薄紅を含み珍奇なる能く盡し難き異麗を極め花瓣は外丸形にて内菊形瓣八重咲大輪。  
 純木性殊に花附能く花色は古金色へ丹朱紅色の深き覆輪掛けに咲出し花瓣剣形よれ狂咲花輪は大ならざるも花色の珍奇異麗愛せらる。  
 性は叢木性花色は濃紅色に満開後緋の斑筋入となり抱受咲最大輪。  
 樹性幹葉とも刺毛最も多く葉は緑色稍白色を帯び花色は色彩ある赤味色を含み金棒色に咲出し花瓣は狂剣形咲八重の最大輪花容良形色彩麗しく大に賞せらる。  
 花色は光澤ある水晶白にして花輪は平形丸咲八重最大々輪花色の純なる殊に賞せらる樹質防寒の手當をなす方適す。  
 木性花附能く花色は白に淡櫻花を帯び中心黄色を含み花容殊に良好なる剣形咲八重大々輪樹性最も強し。  
 樹性強く花色は淡櫻色に中央橙黄色花芯高く良好なる花容八重受咲香有最大輪。

法 秘 培 栽 薇 薔

- ◎桃 山
- ◎楓 林 の 曉
- ◎老 鶴
- ◎華 胥
- ◎龍 王
- ◎春 帆
- ◎黄 胡 蝶
- ◎紫 宸 殿
- ◎鞍 馬
- ◎清 涼 殿
- ◎大 公 爵
- ◎聚 樂
- ◎仙 翁
- ◎永 樂

純木性花附多く花色は鮮桃色にて剣瓣咲花容最も良好にして千重咲の大々輪。  
 強健なる樹性花色は濃棒色瓣端淡く中抱瓣外剣形に開き盛咲八重香有最大輪。  
 葉は光澤ある黒綠色花色は他種に見ざる深黄棒色を中心に含み外瓣は白黄色盛咲八重最香有の大々輪。  
 強健なる木性花色は純赤色にて淡濃なく花瓣剣形盛咲千重の大々輪花容頗る良好最も芳香に富む。  
 強健なる叢木性花色は紅棒色瓣端淡桃色にほかし底黄帯剣形狂咲八重最大輪受咲にて最も珍重せらる。  
 花色は肉色にて中央紅色を呈し花輪の底部黄色を帯花色容良好なる剣形八重咲の最大輪。  
 純木性花色は咲出し卵黄色剣形八重香氣に富む大々輪樹質細形葉は光澤花附能し。  
 純木性葉は青綠色丸形小葉花色は紫紅色花瓣は獅子咲剣形千重の大々輪花色の異麗なる珍重せらる。  
 性強健にして花色は濃緋紅色光澤あり花瓣は切れ形に咲出し廣大形三四重受咲最大々輪秋季殊に美大麗なり。  
 木性葉は光澤ある剣形厚葉花色は茶黄色にして中心は濃く花瓣は三四重廣瓣抱形咲最大々輪花容壯麗愛せらる。  
 純木性樹質強く葉は長形薄葉花色は濃々黄色花瓣は剣形咲八重快開し香氣最も高き大々輪黄花中優逸なる一種たり。  
 花色は咲出し黄紅色にて満開時色底黄を帯び花瓣は細瓣盛形剣咲に開花し八重大々輪開花永く保つ。  
 純木性葉に光澤あり花色は濃棒色瓣端淡く花容剣形咲良好豊麗なり八重最大輪。  
 花色は鮮なる淡紅色にて中心は濃紅色を呈し花瓣は平形或は剣形にて獅子狂咲千重最香有の巨大々輪薔薇中花輪最大なるものなり殊に樹性強し。

法 秘 培 栽 薇 薔

- ◎如 月
- ◎親 王
- ◎錦 舞 扇
- ◎末 廣
- ◎金 華 山
- ◎瑞 穂
- ◎還 曆
- ◎千 載
- ◎鸚 鵡
- ◎淡 煙
- ◎紅 雀
- ◎寶 船
- ◎祝 日

性は強健なる木性葉は長形劍葉花色は淡黄色にして芳香高く丸瓣抱形の八重咲最大々輪。  
 性は良質なる木性葉は青緑色花色は青白色にて咲方は抱玉咲佳香に富み花輪は八重受咲の最大々輪白  
 色の優種たり。  
 葉は厚く稍白色を帯び花色は淡紅色に白と黄をぼかし最も麗しき色彩あり花瓣厚く八重最大々輪本種  
 は極寒並に雨氣注意。  
 木性にて葉は長形平葉樹性細形に枝立花色は乳白色八重花輪は長く花輪は最大輪にして佳香あり頗る  
 氣品に富む白花の優種たり。  
 純木性葉は黒緑色光澤あり樹葉赤色を帯び花色は熟したる枇杷色八重咲最香有大々輪花色樹性花附強  
 健等の良質を備へ頗る愛賞せらる。  
 花色は白黄色にて中心濃く花瓣は厚瓣盛咲千重最香有最大輪。  
 性良質を完備し木性花色淡紅色黄帯中心濃く廣瓣八重咲最香有最大輪。  
 純木性白色に中央濃棒黄色花容は丸形千重最芳香ある大々輪。  
 純木性枝掛け多く赤味あり花色は淡黄色濃淡なく抱形亂咲八重芳香殊に高く花附能き最大輪。  
 花色は表白裏薄色外瓣平形にして中央は抱咲樹性強く伸易きが故切花に適し八重香有大々輪。  
 純木性花色は朱紅に咲出し後紅棒色を呈す異彩ある花色にて花瓣は平咲八重最も花附能き大々輪。  
 性は純木性葉は厚形長葉花色は銀桃色のぼかし覆輪掛外平瓣中抱玉形八重咲最大輪。  
 強健最も花附能く花色は極て鮮麗なる緋紅色光澤あり満開後狂咲秋季濃色殊に愛賞せられ二三重大々  
 輪。

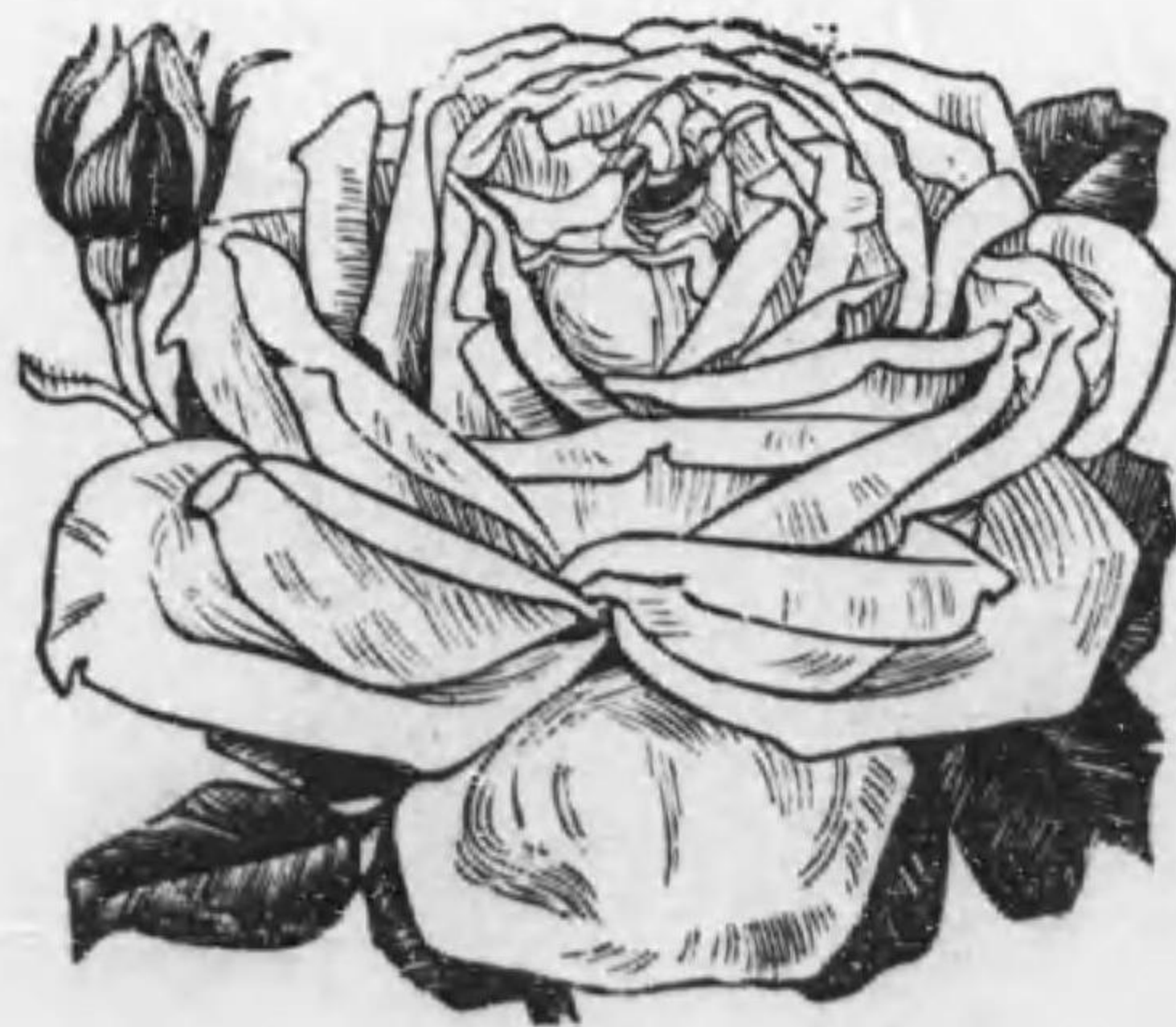
法 秘 培 栽 薇 薔

- ◎白 妙
- ◎高 千 穂
- ◎大 盃
- ◎金 鷺
- ◎煌 々
- ◎頻 迦
- ◎通 天
- ◎黄 昏
- ◎天 龍
- ◎錦 欄
- ◎内 裏
- ◎將 軍
- ◎虹 光
- ◎鳴 海

木性花容劍形盛咲良好葉は濃緑色丸形厚葉花色は極白色香有千重最大輪。  
 木性にて葉は丸形光澤に富み花色は濃クリーム黄にて満開穂色なく盛形咲八重受咲大々輪。  
 樹性細形枝立花色は緋紅色廣瓣抱形咲八重最大輪最も香氣に富む。  
 木性にして強健葉は長形花色は極金棒色美しく廣瓣八重最も芳香に富む最大輪。  
 木性紅色薔薇中の優種にて花色本紅色朱色を帯濃淡なく花芯黄を合劍瓣盛咲千重受咲最大々輪。  
 枝立木性花色は品位ある櫻色濃淡なく大形廣瓣二三重瓣端切れ形最大輪淡白愛賞せらる。  
 葉は黒味ある緑色丸形花色は赤色の純色なるもの花瓣は平形受咲三四重の最大輪。  
 純木性能く花蕾を出し花色は眞黄色にて満開白色となり平形八重大々輪。  
 葉は厚く強健にして花色は淡桃色にぼかし中抱八重底黄色を帯び廣劍形厚瓣受咲最大々輪。  
 純木性にして葉は黒緑色花色は濃き紫紅色又は暗紅色に開花し花瓣は八重抱形の香有大々輪。  
 強健なる木性にして葉は丸形劍葉青緑色花色は白地に中央薄肉色紅掛け八重平瓣受咲の最大輪。  
 純木性花附能く葉は長形劍葉花色は純濃棒色に雪白の大覆輪を掛健瓣受咲の大々輪。  
 薄色地に緋紅上紋り八重平咲大々輪。  
 表肉色裏濃き紅棒色八重劍形盛形大々輪。

法 秘 培 栽 薇 薔

- ◎天 晴 雪白立瓣咲廣大形瓣二三重最大々輪。
- ◎春 風 全桃色平瓣古鏡形千重平咲最も大々輪。
- ◎墨 流 濃黒紅八重咲香有大々輪。
- ◎兩 面 表白色切瓣紅刷目絞裏鮮紅抱受最大々輪。
- ◎千 早 鮮紅色平形咲大々輪芳香殊に高し。
- ◎晴 嵐 青白色黃帶抱形劍瓣受咲八重香有大々輪。
- ◎羽 衣 時色地紅黃色を帶四五重最香有大々輪。
- ◎洛 陽 鮮紅色立瓣咲三四重最大輪。
- ◎暮 雪 淡色八重咲最大々輪。
- ◎敷 鳴 青白色劍形芳香殊に高く千重受咲最大輪。
- ◎高 砂 表白裏薄色千重最香有最大輪。
- ◎明 星 金棒色八重滿開紅掛花附能き八重咲大輪。
- ◎還 樂 淡紅抱蓮花咲八重大々輪。
- ◎流 星 節色黃三四重咲滿開狂劍瓣香有大々輪。



法 秘 培 栽 薇 薔

- ◎豐 明 薄色胤咲千重香有最大々輪。
- ◎鹿 島 棒茶黃色後白色抱八重最大々輪。
- ◎日 光 鮮紅色八重咲最香有大輪。
- ◎金 鳳 純黃八重咲最香有大輪。
- ◎丹 頂 照紅色千重受咲最香有大々輪。
- ◎磨 墨 黑濃紅帶八重香有大々輪。
- ◎金 星 雪白半部濃棒色變化咲八重大々輪。
- ◎麒麟獅子 濃紫紅色細瓣よれ狂咲千重中輪。
- ◎不知火 銅色紅掛け三四重大々輪。
- ◎不 二 純正白色立健瓣咲八重大々輪。
- ◎聖 代 鮮桃色八重玉咲最大輪。
- ◎東 明 桃紅色中芯濃く花瓣劍形千重咲大々輪。
- ◎嵐 雪 純白單瓣咲大々輪。
- ◎辨 天 鮮紅色單瓣大々輪。



法 秘 培 栽 薇 薔

- ◎月 世界 白千重大輪。
- ◎九 尾 金棒狐色千重咲大輪。
- ◎三 笠 表白裏薄色八重抱形咲大々輪。
- ◎崑 崙 深黒紅色鏡珍奇咲八重大々輪。
- ◎秋 津 淡黄紅絲覆輪を掛け花瓣長形千重大々輪。
- ◎嵯 峨 白地薄棒紅掛三四重咲大々輪。
- ◎伽 陵 唐紅色四五重立瓣咲大輪。
- ◎金 盃 黄金色八重咲最香有大々輪。
- ◎新 天 桃色白紋り千重最香有大々輪。
- ◎玉 光 青白千重咲大々輪。
- ◎萬 代 白口紅覆輪千重香有大輪。
- ◎大 鵬 鮮桃色廣瓣平咲三四重咲最も大々輪。
- ◎祥 瑞 薄藤色を帯ぶ千重咲大輪。
- ◎明 石 本濃紅千重香有大々輪。



法 秘 培 栽 薇 薔

- ◎人 丸 棒茶銅色單瓣大輪。
- ◎花 房 緋紅平形八重大々輪。
- ◎錦 紅 表鮮紅色裏白色平瓣八重大々輪。
- ◎金 碧 朱銅色平形二三重大々輪。
- ◎錦 旗 時色紅縞紋り抱咲八重大々輪。
- ◎慶 賀 底黄棒色帶白色香有千重咲大々輪。
- ◎泰 平 淡紅色廣瓣千重劍瓣車咲の最も大々輪。
- ◎天 地 桃色千重香有大々輪。
- ◎美 香 棒黄八重大輪。
- ◎大 山 極黄千重大々輪。
- ◎瑞 寶 極棒白覆輪八重大輪。
- ◎泰 山 白千重大輪。
- ◎不 讓 本紅滿開黒紅に變ず八重大輪。
- ◎桃 園 淡紅萬重大々輪。



- ◎天國香 薄紅八重大輪。
- ◎黃石公 眞黃色千重咲大々輪。
- ◎慶典 深紅色長瓣咲八重大輪。
- ◎唐錦 紅白本紋り八重大輪。
- ◎紅司 純赤色廣瓣八重大々輪。
- ◎金光殿 薄黃滿開紅掛に變ず千重大輪。
- ◎陽臺夢 桃色千重最も大々輪。
- ◎驪山の月 楊貴妃枝變り雪白八重大輪。
- ◎西王母 棒八重大輪。
- ◎世界の圖 時色萬重大輪。
- ◎常夏 鮮紅色丸形抱咲千重大輪。
- ◎白天國香 白色八重咲最香有大輪。
- ◎千里香 棒黃八重大輪。
- ◎鶴頂紅 極紅千重大輪。
- ◎揚貴妃 淡紅八重大輪。



- ◎青 花 綠色千重小輪。
- ◎初 狩 表時色裏桃色波狀瓣二三重咲大々輪。

### 第三章 園養法

彩霞朧月の交、千紫萬紅、觀るものをして惱殺せしめずんば止まざる底の群芳百花に混つて、牡丹芍薬等と其の濃艶美麗美を相争つて居る春の花壇に見る薔薇の花よりも、余は矚目千里蕭々落窶の秋、骨も露はに散り盡した木立、荒涼の色漲る野山、人の心は常闇の死の國へでも引入れられるかの様に寂しい心細い感に堪へない時、籬の霜におごる菊花に交り、鮮紅焰と燃ゆるサルビヤに對し、散りしくコスモスの下、優情の温味と豊婉の佳香とを莞爾たる微笑に見せて、玉葩彩かなる薔薇の花が、より美しくより優しい趣をもつと思ふ、と云つて直に薔薇を以て秋季の第一花なりと推賞するのではないが、只余のセンチメンタルな頭腦には、然う思はれてならないのである。

餘談はさておき、愈々これから培養法の緒に就く譯であるが、元來薔薇は栽培者其人の好みによつて、庭園仕立とも盆栽仕立ともすることが出来る、即ち本章に於ては専ら園養法の一斑を述



べることしやう。

## 一、氣候及土質

大抵の園藝家は口を揃えて、薔薇は誠に栽培し易いものであると云ふ、成程多年の経験によつて其の秘訣を會得した人から見れば、實際容易なことに相違あるまいが、まだ経験の積まない人乃至初心者、此の言を眞に受けて栽培に従事せんか忽ち意外の失敗を見るであらう、故に余を以て云はしむれば、薔薇の栽培は決して容易なものではない、頗る周到細心の注意を要するは勿論、特に優良秀逸なる美花を得んとするには、最も苦心丹精せねばならぬと、蓋し之一に薔薇栽培の場合に限らず、世上百般の事、凡て此の心掛が肝心である。

さて薔薇を栽培すべき土地は、氣候の温暖寒冷は餘り多く問はないが、土質はその種類によつて一定して居ない、或は粘土質の重粘なるのを好むものもあるし、又は輕鬆なる砂礫質の土地に適するものもある、併し概括して云へば濕氣なき温暖なる土地で深く耕されたる粘土質が最も適して居る最良の土壤である。

## 二、花園の設置

花園を設置するには、第一に日常の良い所を選び、成るべくは少しく傾斜面ある土地で、他の樹木の枝梢又は根などに妨げらるゝ憂がなく、且つ烈しき風を受けない様に生籬などを設けた場所がよろしい、通風が悪かつたり、日光の直射の少ない所などに栽培すると、何うしても病虫害に罹り易く、爲めに所要の美花を見ることが出来なくなる様な不結果に陥入るから場所の選定には深く注意せねばならぬ。

「薔薇の花園は被蔽するを要す、然れども隠蔽す可らず」とは斯界の泰斗テイーン、ホール氏が花園の構造に就て述べた有名な言である最も味ふべき言葉であると思ふ。

かくて花園設置の場所定らば、先づその土地を能く耕して木石の碎片、雜草根などは悉く除去し、過不及なきやう適當の深さに耕さねばならぬ、或る園藝家の説によれば、花園は東及北を遮蔽したものが一等よろしいと云ふことである。

床の廣狭は各自の任意であるが、園地の面積に應じて整然區劃を設け、長さ隨意、幅四尺乃至六尺位とするのが適當であらう、そして培養管理に使せんが爲め、畦間に適宜の通路を設け各

品種の前面には必ず木片にその名稱を記して一目瞭然たらしむるがよろしい既に前節にも一寸述べておいた様に、蓄薇は最も濕潤なる土地を忌む性質を持つて居るものであるから、若し濕潤なる土地に栽植せねばならぬ場合には、その土地を深さ三尺位掘り起し、底部一尺位に石瓦様の碎片を入れて排水の便を計り、その上に適當の土を入る、だけの勞作を行はねばならぬ。かくて花園の設備なれば次は栽植にうつる。

### 三、栽植の方法

蓄薇の栽植は春秋の兩季に行ふことが出来る、人によると初春二月頃栽植するものもあるが、一般に春よりも秋の方がよい様である、特に矮性及蔓性のものに於て然うである、そして栽植前更に表土二三寸位を能く耕耘し、適宜の肥料を施さねばならぬ。栽植の方法も深きに過ぎず、淺きに失しない様にする必要がある、矮性のものには、往々深植する場合もあるが、蔓性のものには、あまり深く栽植するは却つて不利益である、又植付は二列に凡二尺五寸位の間隔をおいて栽植後は覆肥を各株の周圍に施さねばならぬ。蓄薇は成るべく、同一種のみを同一の場所に栽植することが必要である、而して寒氣の激しい

地方は十一月の半頃から翌年三月初旬位まで簡單な霜除装置をなしておく、又春季その成育を初むる前に、床地の表土三寸位をよく耕すがよい、併しあまり深く耕すと根を損傷するの恐があるから注意を要する、其の他の手入れ保護等は後章に於て詳述する筈である。

### 四、肥料の種類

蓄薇の肥料として最も有効且つ普通なものは、堆肥、油粕、米糠、乾鰯、過磷酸石灰等である左に之等の性状及び施用法を簡單に説明しやう。

(一)堆肥 此の肥料は種々の廢物、塵埃などを堆積して、酸酵腐敗せしめたもので、三要素は勿論その他の諸有機分を多量に含有して居る極めて有効の肥料である、之が製造及使用法などは余輩の囀々を待つまでもなく、多くの人の熟知して居る所であるから、それらは他の肥料書に譲つて茲には省略する。

(二)油粕 莖莖の種子を搾つて油を取つた残りの滓である、磷酸、加里、窒素の三成分も適當に含んで居るし、且つ分解も左程遅くない、蓄薇栽培上必要な肥料である。

此肥料は厩肥や水肥に溶かしたまゝ、二三時間放つて置いてから使用するのが一番有効であるが

普通の水に溶かして能く腐熟してから與へてもよろしい但し濃厚なものは却つて害があるから成るべく稀薄にして少量づゝ施すがよい。

(三)米糠 米糠も亦薔薇の肥料として大切なものゝ一である、従来の栽培家が此の肥料の使用法を見るに、多く炒りたる後に腐敗せしめて用ふる様である、経験家の考案を貶すのではないが之も矢張り油粕同様水に浸して腐熟せしめたものを用ひた方がよい様に思ふ、何となれば米糠の炒つたものは頗る香氣が高いから蟲類の嗅官を喚起する、それが爲めに蟲害——特に蟻の害を蒙ることが少くない實例を見聞したからである。

(四)乾鰯 三要素は窒素〇、七五、磷酸〇、三七、加里〇、七〇の割合に含んで居る、之を使用する場合には、細粉となして水に浸し、そのよく腐熟した後に用ひ、決してそのまゝに施與してはならぬ。

(五)過磷酸石灰 施分量の少き割合に、効顯の著しきものあるは此の肥料の特色である而して此肥料は約十六%の磷酸を含有し、且つ土中に浸込み易い性質を持つて居るから、之を用する場合には、只地上に撒布するがよろしい、石灰に近づけないこと、及び此の肥料施用後は時々灌水すること等に注意する必要がある。

此他尙種々の肥料もあるが、餘り管々しいから説明を略する、但し次章盆栽用肥料の項は是非参照して貰ひたい、右に記述したものを以外に就ての秘説であるからである。  
又洋書の一節に「薔薇の肥料として最も簡易なるは、糞糞粕、魚肥、各種の鳥糞、牛糞及び豚糞とす、其中牛糞を第一として豚糞之に次ぐ」とある、余はまだ此の花に牛糞、豚糞を施用した経験がないから、事實の是非は知らぬ、只参考までに附記しておくに止める。

### 第四章 盆 養 法

#### 一、盆栽の眞味

寸尺の盆裡に森々亭々、蒼苔幾千歳を経たるかを疑はしめ、又は緋屈曲折妙じくも自然の力に抗し、一種美妙の風趣を發揮して幽韻の情坐に觀る人の胸を躍らすは盆栽である、常識より判斷して見ても分るが、自然は實に廣大無邊なものである、此の靈妙なる偉大なる自然の姿そのまゝを、拙劣微弱な人間の力で僅に寸尺の盆裡に現出せしめやうとするのであるから、實に無暴な企である、大膽な所業である、併し又社會文明の第一義は、自然を征伏するにありてふ定義か

ら推せば、微々たる盆栽にも尙或る一種の意味あり力ある人生観が含まれて居ると云ひ得る、否  
全く偉大深遠なる啓示暗示が潜んで居る、只植物を盆裡に植ゑさへすれば、それが即ち盆栽だと  
考へて居る様な人は、論ずるの範圍でないが、眞に意味あり生命ある盆栽らしき盆栽を作らんと  
するには、決して一朝一夕の勞で、良好の結果を得るものではない。

初夏の花園、晩秋の離畔に、嬌婉華麗、美薫を誇る薔薇の花に咏懐をやるもさることながら、  
或は庭前窓側、或は卓上机邊、盆に收め鉢に移したる紅白數輪のローズに對して、西歐の詩を吟  
誦さむも亦新殊別様の深い趣を感じるであらう、否寧ろ玉石混淆、美醜雜居の花園に於けるより  
も容色佳絶、所謂一粒選りの觀があつて、盆裡の花一段の美を覺ゆる、蓋し丹精の効は茲に至ら  
しめねば止まぬのである。

之を要するに盆栽は大自然の縮圖である、而して「不自然なる培養の下に自然の姿を見んとす  
る、努力の結晶である、盆栽の眞味を有する點も又實にそこにある。

今、薔薇の盆養法を説かんとするに先ちて、斯くの如き駄辯を弄するの世も世上盆栽の意義を解  
せず、眞味を知らざる人々の爲めに、聊かその惑を解かんの微衷に外ならぬのである。

## 二、培 土 (種 土)

例へば野に放たれたる畜類が、俄に檻倉内に押込められたのと同様、花園から盆裡に移された  
植物は、必らず窮窟な思ひをするであらう、即ち養分を攝取する場所も狭く、且つ時々灌水せら  
るゝ爲めに自爲肥料分も排水によりて流失し易い、それやこれやで兎もすれば養分の不足を來す  
に相違ない、この憂患を防ぐ爲めには何うしても培土、即ち豫め充分肥料分を含ました種土を  
作つてをく必要がある。

此の培土、盆栽用土の調製法も人により種類によつて、多少の異ひはあるが、茲には其の二三  
を紹介しやう。

- 一、壤土に米糠の炒つたものと、腐植土及び砂交りの眞土とを混ぜ合せ二日間よく日光にあて  
ゝ篩過したもの。
- 二、塵芥の腐熟したもの、又は腐植土と砂交りの眞土とを略同量に混合して篩過乾燥せしめた  
もの。
- 三、乾燥せしめた溝泥を篩過して、之に適宜の粕を混入して腐熟せしめ、尙之に砂交りの眞  
もの。

土を交せて篩過したもの。

以上は薔薇の盆栽用培土として、最も適當なものであるが、終りに余は某實驗家の秘訣とせる種土の作製法を記して同好者にお知らせしやう。

芙蓉粕と圃土と米糠の三種を等分に混和したものに水を加へ、充分に濕したる後、空樽様の器に入れて、約一ヶ月間、風も雨も、日光も當らぬ所におき、時々見廻つては餘り熱氣の上昇せぬ様に水を注ぎ／＼して、徐々に醗酵させ、そして醗酵も終り漸く冷かになつた後之を一升と粘質の圃土一升と砂一升の割合に混合して能く攪拌せたものが即ち種土である。此の種土を盆中に盛つて、こゝに栽植すれば、其の後は屢々肥料を施すの必要もなく、只開花の前後に稀薄なる水肥位を與ふれば充分であると云ふ。

### 三、植 木 鉢

「一體薔薇に限らず、總て盆栽には陶燒の鉢（俗に云ふ瓦鉢又は土鉢）に限る西洋でも陶燒のこをレットポット又はスタンダードポットなど、云つて廣く園藝家の間に用ひられて居る、第一此の瓦鉢は水分及空氣を吸收保蓄し又温熱を放散含蓄するの力があり、頗る樹根の生育に適當し

て居るから花の美大なるを得んとするには是非此の鉢を用ひねばならぬ」とは凡ての盆栽家の異口同音に言ひ且つ一齊に實行しつゝある所である、實際又價格が安くて重寶で雅趣があると云ふ三調子揃つて居る植木鉢は此の瓦鉢を措いては他にないのである。

併し又床の間や卓上の珍とするには、瓦鉢そのまゝではあまりに不體裁殺風景極ると云ふ人もある。若し然う云ふ場合には俗に云ふ入子乃ち裝飾盆を別に備へておいて、花の將に開かんとする際に、その瓦鉢を裝飾盆内に嵌入して陳列すればよろしい、裝飾盆は朱泥でも交趾でも青磁でも各人の好み次第であるが、兎に角盆栽を仕立つるには……根固めをなすには、必らず一度は瓦鉢を用ひねばならぬ。

植木鉢！と只一口に云つても此の中にはまた種々の品質種々の形状、種々の色合のものがあつて、薔薇を栽植するに際しても、鉢と樹容との關係やら、花の色と鉢の色との配合やら、培養者自らの考究すべき點が少くない、茲には此等の點に就て思ひついたまゝの一端を述べやう。

一、鉢の深淺と樹の生育　これは餘程研究すべき問題であるが、要するに寒暑氣——根株の伸長——乾濕——等の關係から考へて見て鉢は淺いのよりも深い方がよい様である、特に盆栽初歩の人に於て此の感を深くする。

一、鉢の大小と樹の體裁

鉢にも大小があり、樹にも亦喬矮があるから、鉢の形状に應じて薔薇の株も大小を選ぶが至當であるが、それでは平凡で面白くないと思ふ人は、淺い鉢に丈高き樹を植ゑ、小盆に大樹を植ゑる等の變態の培養法を行ふのも特殊の妙味があるであらう、併し普通に盆の大小深淺は口径五寸深さ三寸を以て最低度としてある。

二、鉢の色と花の色

色彩の配合は極めて興味ある問題である、何となれば色の配合如何によりて大にその物の美醜に影響するからである、鉢と花との關係に於ても又然うで、例へば白色の鉢に白花を植ゑても少しも引き立つまい、即ち配合が拙劣な爲めである故に觀賞上一段の美を發揮せしめんとすれば、何うしても原色と餘色との關係を知り、其の對照の理を應用して色彩の調和を計るに如くはない、一例を示せば、美香登の如き樺色の花は、青色の鉢に植ゑ、黄の司の如き黄色の花には紫瑠璃等の鉢に植ゑるが如きである。

四、青苔と白砂

鉢の表土を美装せしむる爲めに青苔や白砂を敷いて風致をよくせしむることがある、苔は日光や空氣の土中に入るを妨げて植物の發育上あまりよくないと云ふ人もあるが、それ程大した害は無論ない、紅薔薇の根に白砂を盛り白花の鉢に青苔を植ゑるなども、色彩の配合上、又一掬の雅趣があると思ふ。

四、盆栽肥料

盆栽肥料と云つても、同じ薔薇の肥料であるから園養法の章下に説いたものと別段變つた所はない、あれをあのまゝ盆栽の肥料として用ひても無論差支はないが、茲に態々盆栽肥料なる項目を設けたのは、特に盆栽肥料として最も簡易に最も有効なる水肥の製法及び用法に就て、某實験家の談を紹介せんが爲めに外ならぬのである。

原料は糞草粕、魚肥、鳥糞、以上三種の中何れでもよい、水二斗に鳥糞なれば鳥糞、糞草粕なれば、糞草粕の五合計りを溶かし、十日内外そのまゝに放置して腐熟させ、臭氣を發するに至つた頃、その上澄液を汲み取つて他の器に移し、之と同分量の水を加へて稀薄にしたものが即ち所要の水肥である。

之が使用法は前節培土の項に於ても略述しておいた様に、發蕾前と謝花後、及び所謂肥切れの兆ある場合に鉢中の土表に澆ぎかけるのである、但し移植した場合には根の能く落着くまで、乃ち二週間内外は施しては不可ない。

尙此の他盆栽用肥料としては實験の結果、牛乳、米泔汁等も簡便にして有効な肥料である。

## 五、盆 栽 棚

四四

薔薇に限らず盆栽は凡て適當なる棚を庭園に設けて其の上に陳列するが普通である、盆栽棚を設くる場合には必ず樹蔭又は軒下などの濕地を避け、日光の直射する且つ空氣の流通好き地を選んで、南方を背に即ち北方に面して装置するがよい、これ薔薇は生理上尤も日當りもよく又通風も充分の處でなければ、成長も不良、従つて花も亦艶美なものを見ることが出来ない。のみならず、恐るべき病蟲害にも侵され易いのである、棚の作り方は各自の隨意であるが、肥培、灌水などをなす時の便利を考へて、成るべく丈夫に且つあまり高くないやうに注意する必要がある。

## 六、陳 列 法

調和と云ふことは社會百般の事々物々に必要であるが、薔薇の盆栽を陳列するに當りても亦最も必要である。

陳列は陳列である、何の思慮も何の苦心も要らぬ、只鉢を順序よく並べるまでの事だと云ふや

うな没趣味の人には、話しても分るまいが、一寸した盆栽の陳列に依つても、直にその人の審美心の高下、趣味の雅俗が察せらるゝものである、此點から見ると一小些事でも決して馬鹿には出来ぬ。

併し陳列法と云つても別に一定の法則がある譯でもないから、要するにその周圍との調和、場所の配置——即ち陳列の仕方は各自の意匠考案に任するより外はない。

瀟洒たる墨繪の一軸をかけた黒檀の床上には、大輪白花の青滋鉢を添えて、清新幽雅の情趣を一室に籠むるもよからう、壁間にはマリヤの油繪書架にはヴィナスの大理石像、水色のカーテンに日の影くらき洋館應接間の卓上などには、紅紫數盆を配置して、温味と富麗とに來客の心目を嬉ばしむるのも其の一法であらう。

之を要するに、室内と戶外とを問はず、陳列に際しては、常に花の高低、遠近、疏密、色彩及び盆の大小、方圓、品質、形狀進んでは鉢と花との色の調和、周圍の事物との對照——それらのものを念頭に置き、尙之に自己の工夫、考案を加へ、成るべく趣味あるやう、不自然ならざるやう、花の眞價を發揮するやう、觀る人の美觀を牽くやう——詰り調和の美と云ふことに着眼し、注意したならば、少くとも理想に近き陳列をなすことが出来るであらうと信ずる。

四五

七、素人盆養法

盆養法の大略は以上の通りである、尙それに附随した詳細は逐章順次に説明して行く筈であるが、こゝには近頃シユインド博士の發表した素人の盆栽薔薇培養法なるものを紹介して本章の終結とする、亦多少の参考になるだらうと思ふ。

先づ十月の末頃若芽の勢の良い一本の苗木を直径五寸乃至八寸の鉢に植付ける、土質は暖床土と芝土とを等分に合したもので砂土質よりも寧ろ粘土質に傾く方が適當である、鉢の表面には一寸乃至一寸五分程の厚身に川砂を盛り置く、之は抜け水を良くして土を酸化せない様にする爲である、そこで是を暖めない温床に置くか又は風通しの良き地下室に置いて霜の害を避けねばならぬ、霜の降らざるに至つて初めて鉢を庭園に出して鉢の縁のところまで土中に埋める、鉢と鉢との間隔は一尺五寸位が適當で鉢底の穴の側に二つの小石を並べて置く事を忘れてはならぬ、其の時に薔薇を半ば刈込んで各枝に五ツ六ツの芽を残して置く、そして鉢ぐるめに一帶に克く腐朽した厩肥を敷うて置く、之は後に灌水する毎に新に土を肥す種となり、且つ常に湿度を保たしむるに必要である、かうして置くと夏の間艶麗露も滴らんばかりの薔薇花は咲き匂うて籬の外を通

第五章 移植法

る人も足を止めて見蕩れる様になる、然し七月の終りには幹に力を入れさす爲めに一ツ二ツの花を残して他は摘取つた方が善い、九月に入ると最早や灌漑してはいけなない、鉢を土中から取出して棚にでも乗せて置くとズン／＼大きくなる、十月になると適宜に刈込みて暖めない温床又は地下室へ入れて置くのである、尙他の鉢に分植しやうと思へば此の際三ツ四ツ芽のある枝を他の野生種に接げばよい、切接でも割接でもよい。

移植は一見甚だ簡易な作業の如き観がある、實際又然う思つて居る人も多い様であるが、之大なる誤解であつて、移植は培養法中最も重要な事項の一に屬しその巧拙良否は直に薔薇の榮枯盛衰に至大の關係があるものである、これ余が特に一章を割愛して移植法を講述せんとする所以である。

一、移植の時期

移植の時期は各地の氣温管理の巧拙種類及發育の如何其他外界の狀態事情に因りて一概には



定められぬ、併し一般に嚴寒及酷暑の候を除けば時を選ばず之を行ふても差支ないとしてあるが  
經驗の結果に徴すれば春秋の二季を以て最適とする、今大體の移植時期を擧ぐれば

一、地植移植の時期

十月中旬及び四月上旬

二、地植より鉢に移す時期

十一月中下旬

三、鉢より鉢に移す時期

嚴寒酷暑の候を除けば時季を選ばず

但し以上は東京附近の氣候を標準としての時季であるから、極寒極暑の地方に於ては多少の  
斟酌をなさねばならぬ、併し要するに樹液未だ發動せず、その將に發動せんとする即ち發芽期に  
近づきたる頃を移植の最好適期と覺えて居れば誤りはない。

次には移植すべき日の天候！ これも亦注意すべき必要がある、即ち移植を行ふに強雨暴風の  
日に於てなす可らざるは勿論であるが、それかと云ふて又晴天の日中に於ても行ふてはならぬ、  
その之をなすに最も適當なのは所謂半晴の日、時は夕榮の雲美しくしき薄暮、又は雲低く垂れて風  
全く死し、陰暗の天將に微雨肅々たらんとする曇天の午後である。

## 二、鉢より鉢へ

必要上鉢から鉢へ移植する場合を除いても、盆栽の薔薇は毎年一回は必らず床地に下すか、又  
は他に新らしき培土を盛つた鉢に移植せねばならぬ、これ養分の缺乏による凋衰を防止せんが爲  
めである。

鉢植のものを他の鉢に移さんとする場合には、先づ移植すべき鉢及び培土の準備をなさねばな  
らぬ、即ち鉢は今までのものより一廻り大形のものを選び、底部の水抜穴は貝殻瓦片等を以て適  
度に塞ぎ、豫め用意しておいた培土——所謂種土を今一度篩過して鉢の深さの三分の一まで入  
れる。

これまで準備が整へば、今度は現に植つて居る方の鉢の内部に於ける土を少しく掻き落とし、片  
手で押へ片手で鉢の縁を軽く叩くと雑作もなく培養土に固められた根を鉢から離すことが出来る  
そこで此の固着して居る土を拂ひ落とし先づ根を極めて見て若しも根部に傷や腐れたものなどがあ  
れば、鋭利な小刀で以て全然それ等の部分を切り捨て、完全な生氣ある根ばかりを選んで、既に  
準備しておいた前記の鉢に入れる、其の方法は移植せんとする薔薇の根元を左の手に持ち適宜  
の位置を定め、右の手にて例の種土又は篩分した肥土を緩かに鉢に充つるまで投入し、尙軽くそ  
の周邊を叩き乍ら土を落ち着かせた後に左の手を離し、兩手の拇指を以て成るべく根元を避けて

他の場所を鎮壓するがよい、かくて此の操作が終れば如露を以て徐々に灌水し、新に移植した鉢の排水が佳良であるか否かを檢視する必要がある、若し排水不良なりと認められた場合には、又水抜穴を程よくして植え直す丈の手数を再びせねばならぬ。

五〇

### 三、園より鉢へ

元來地植又は園養のものは、自由自在に根を蔓生して居るものである、故に之をそのまま掘り起して直に狭少な盆裡に收むることは不可能事である、即ち之を鉢植とするには發育を害せざる範圍内に於て、其の土中深く蔓生して居る所の纖毛を切斷するの荒療治を施さねばならぬ、と云つて移植の當日に之を行つては不可ない、少くとも一週間以前に移植せんとする薔薇の根の周圍を掘り巡らしておいて、多くの纖毛を切斷しておいて、漸くその損傷になれた頃を待つて用意の鉢に收めねばならぬ。

移植の方法、順序は前項鉢より鉢へ移す場合と全然同様にすればよいが、只聊か異なる點は、移植を終へ灌水をなしてから、約七日間は日光に直射せしめてはならぬ、夜は夜露に打たせ晝は日蔭に置くべきことである。

### 四、鉢より園へ

盆栽の薔薇を花園又は地床に移さんとする場合には二つの方法がある、其の一は、排水良好の地を選びて穴を穿ち、鉢のまゝ挿入して土面と鉢の縁とを殆ど平行に埋めておくのと、今一つは鉢植より掘取りて土を拂ひ落し、園養法の章下に述べた栽植の方法に準じて移植すればよい、要するに此の場合には前記の二法に比べて至極簡單且つ容易である。

### 五、注意條項

移植上注意すべきことも澤山あるが、茲には特に必要なる條項のみを二三列記するに止める。  
一、移植せんとする薔薇の根は決して日光や風雨に曝露してはならぬ、これ根毛を空氣中に晒すと忽ち乾燥して生育機能を失ひ、爲めに折角移植しても活着し得ざるの悲運に會するところがある。

二、移植せんとする場合には、成るべく根部を傷けぬ様注意せねばならぬ、但し故障のある、根は鋭利なるナイフを以て一刀の下に切り捨て、その斷口には土を塗抹して移植するがよい

- 三、庭園に移植する場合、その定植せんとする地に豫め注水する人もあるが、これは有害無益である、併し移植後の灌水は必ず忘れてはならぬ、それは只に土壤に濕潤を與ふる計りでなく、根邊の鎮壓をも兼ねるの效果あるを以てである。
- 四、移植前の施肥及び移植終了後直にその根の周圍に敷肥をなす人もあるがそれもあまり宜しくない、寧ろ根付きたる後に於て施肥すべきである。
- 五、花園に移植する際には、肥沃な壤土を粉末にしたものへ、牛糞の混合液體肥料及び灰泥を混合したものを栽植すべき穴の底部へ入れておくと、根部の發育が一層良好であると云ふことである。
- 六、盆裡に移植した場合、鉢内の土を鎮壓するに際しても、無茶苦茶にやつては不可ない、移植の時季によつて自ら強弱の差がある、乃ち春季に移植する時には昃めて緩く、秋季は稍強く壓さねばならぬ。

## 第六章 繁殖法

### 一、繁殖の種類

繁殖は宇宙間の總ての生物に取りて最も貴重なる原理である、自己生存の義務である、人類に於て然り、動物に於て然り、植物の一種たる薔薇に於ても亦然らざるを得ないのである。

元來草木を人為的に繁殖せしむるには、實生、株分、壓條、挿木、接木の五つの方法がある、併し此の五つの繁殖法の中でも、種類により場合に依つて適不適がある、今説明せんとする所の薔薇は、樹性強健な花卉であるから、何れの方法に依るも繁殖し得られないことはないが、其中で普通に廣く行はるゝのは接木、挿木、實生の三法——特に初歩の人に適するのは挿木及接木法である、故に本章に於ては、専ら此の挿木法、接木法に就て詳述し、終りに實生法の一斑を擧げ、其の他の方法は之を省略して記述しないことにする。

重ねて云ふ繁殖法は植物の培養法中最も興味あり又最も必要なる處作である。

### 二、挿木法

植物中の或るものには、強壯なる、枝梢を切りて土中に挿入しておくと、その枝梢の下端は土中の濕氣の吸収と、養液の運行とに依つて、類化作用を営み、遂には根を生じ葉を出して容易に一箇獨立の植物を形成するに至る、此の理、此の法によつて繁殖せしむるのが即ち茲に陳べんとする挿木法である。

五四

薔薇の挿木は、凡ての繁殖法中最も簡易な方法で、併も百發百中、殆ど之を活着せしむることが出来る、とは云へ尙相當の注意と保護とを要することは勿論である。

又同じ薔薇でも、其の下の種即ち野生薔薇、庚申薔薇等の如きものと、上等種即ち美香登大山吹等とは挿木の方法も同一でない、茲には其の上等種に就て稍詳細なる説明を加へて見やう。薔薇の挿木をなすに當り、之を温床内に於て行へばそれに優したことはないが、普通の床地に於ても決して不結果を來すものではない。

**挿木の季節** 温室を有する時は、殆ど四季を通じて時を選ばず之を行ふことが出来るけれども、普通の床地に於ては、春は二月中、即ち發芽前、夏は梅雨中即ち春芽の生長一但休止したる頃、秋は九月中旬から十月上旬まで、即ち夏の芽の生長一時休止した頃を以て適期とする。その中でも梅雨季に行ふたものが一等の好結果を得るやうである。

**挿木床** 床地は細砂五分と赤褐色粘土の即ち肥養分なき底土とを篩つて能く混ぜ合せたもので構成する、先づ挿木床は日當りのあまり強くない、排水可良の地を選んで五六寸の深さに耕し能く土塊を砕いて其の表土二三寸ばかりを除き去つた跡へ、前述の挿木土を地面より二三寸の高さまで盛り入れるのである。

**挿穂** 挿木に供すべき枝條、即ち挿穂は一年生の強壯な穂木で、木質堅實し、隨心少なき部を以て最上とする、穂木の長さは三寸以上五六寸までに切り取つて其の基部は他の挿穂の場合と同様、鋭利な小刀で稍斜に平滑に削り、豫め杭を以て二三寸の距離に穴を穿つておいた挿木床へ其の三分の二を挿込み、周囲の土を指頭で固く壓え付け、二尺位の高さに葎簣で日覆をしておく。

**施肥** 挿木後約一ヶ月も経てば、既に活着して生長を初むるものである、故に此の期に至れば、日覆を除き尙二三寸に生長した頃から水肥の稀薄なものを時々施せばよろしい。

**挿木鉢** 前記の如く床に挿さず直に鉢に挿さんとする際には、口径五六寸の陶燒製のものを取り、底穴を瓦片、鉢片等で塞ぎ、尙其の上に石礫、瓦片等を敷いて排水の便を計り、細砂六分篩分した肥土四分とを能く混合したものを盛つて、其の表面を壓へて平にしたものへ挿穂を挿入

五五

し濕氣を興ふればよい。

適種 挿木用としては一季咲種よりも四季咲種の方が活着し易い、その中でも、特に發根活着共に容易な品種を二三あげて見ると左の通りである。

峰の雪 四海波 醉揚妃 泰山白 王冠 天國香 虎の洞

注意 挿木の方法大略右の通りであるが、尙補遺として二三の注意を附記しておく。

(一) 薔薇の極めて強壯なる種類は其の新枝梢一ケ年に三四尺乃至五六尺も伸長することがある、試みに之を切り取つて檢べて見ると隨心極めて太く木質頗る柔く且つ小さい、斯くの如き種木は、挿穂用として不適當なものであつて、善し之を挿木にするも根を生せずして腐敗して了ふ、故に挿穂の良否を檢することは最も慎重の注意を要する。

(二) 挿木後其の發根を促す爲めに適宜の灌水をなして濕氣を興ふることは必要であるが、發根後も尙多量に灌水するが如きは深く慎まねばならぬ、何となれば、あまりに濕潤に過る様な事がある、遂には根部の腐敗を來すからである。

(三) 外人の説によると、挿木を温室内で行ふ場合には、充分に成長した親木の枝を、十一月乃至十二月頃、長さ二三寸位の短かさに切つて砂土に挿して室内におく、すると翌年二三月頃に

至れば之に根を生ずるから、六月の交、苗圃に移植すればよいと云ふ、参考として掲げておく。

### 三、接木法

接木とは一種の種穂又は種芽を以て、他の樹木乃ち砧木に活着せしむる一の繁殖法である、其の理は、彼の挿木又は挿芽に於ける關係と同じく、只その些か異なる點は、挿木の無機質土壤に活着せしむるに反し、接木は有機質の砧木に活着せしむるの差異あるに過ぎない。

接木は園藝作物繁殖法中、最も普通なる最も便利なる、且最も有効なるものであつて、其の方法の種類も亦甚だ多いが、便宜上之を大別して左の三種類となすことが出来る。

- 一、枝接法 母木より其の穂木を切り離して之を用ふるもの
  - 二、壓接法 其挿木を母樹より切り離さずして之を用ふるもの
  - 三、芽接法 母樹より其の芽を切り取りて之を用ふるもの
- 右の中枝接法を又左の數種に別ける。

- 切接 割接 挿接 根接 舌接 囊接 鞍接 腹接 塔接 寄接等

以上接木法各種の中、薔薇繁殖の際普通に行はるゝは、切接、囊接、芽接の三法であつて、就中切接即枝接は、最も輕便有効なる方法とせられて居る。

**時季** 接木をなすに當りては、先づ第一にその時季を知るの必要がある。若し適期を誤れば如何に施術巧妙を極むるも其の奏効不十分なるを免れないからである。併し季節も種類の如何接木法の種別、並に土地の氣温等に依つて確然とその時日を一定することは出来ぬ、特に薔薇は殆ど四季を通じて接木をして差支ない特性を有つて居るが、概して之を云へば春影己に動き樹木の生育機能初り、樹皮光澤を帯び、將に發芽萌綻せんとする頃を以て最適期であると思ふ。

**砧木** 接木に供すべき砧木に二種の別がある、一を居接砧、一を掘上砧と云ふ前者は種子を蒔き又は挿木法によつて砧木を養成し、その砧木を掘り取らずに、接ぐべき部分から切り取つて直に接木するもので、後者は其の砧木を掘り取り、根を適宜に切り詰め、秋季落葉後より假植しおくか、又は接木の時宜に至つて其の根を切り詰め、而して後に接ぐべき部分より切りて之に接木を行ひ、一定の距離に栽植する方法である。

**砧木養成** 薔薇の砧木は専ら野生のもの、所謂野生薔薇に限られて居るの觀があつて、挿木又は播種によつて特別に砧木を養成する様な人は餘り多くない、併し種子を蒔いて砧木を作る

ことは將來頗る必要なことで培養家の研究すべき重要な作業であらうと思ふ、何となれば實生に依れる砧木は、其の資性良好且つ壽命も亦長いからである。

其の方法は後節實生法の條下を参照して砧木を養成せらるればよろしい。  
**砧木の種類** 接木施行上、砧木の研究は頗る肝要なことで、培養家の最も注意すべき問題である、既に砧木養成の必要を説いた余は、次で砧木の種類に就ても一言せねばならぬ、と思つて二三の参考書を獵つて見ると、こゝに最も信頼すべき經驗家の實説を得た、即ち其の一節を録して直に余輩の拙き叙述の筆に代えやうと思ふ。

薔薇は花木中にありて世人に賞愛せらるゝこと深きものゝ一なり故に栽培法に就ても吾人の研究を要すべきもの多きこと勿論なるが苗木を作ることに於ける得失も亦大に研究せざるべからざるなり何となれば此植物は本來歐米を以て其原産地となせるを以て歐米にては之れに就て研究せられたるもの頗る多かるべしと雖も本邦に渡來せる年月は未だ遠き過去にあらざると並らびに之れを栽培する花戸並に苗木を作るもの共に之れに向つて深かき注意を以て研究せざる結果として花卉栽培の流行せる今日と雖も尙ほ舊套を脱せざるもの多く改良を講ずるもの少なきは歎すべきことゝ云ふべし今普通に行はるゝ薔薇苗の生産法を見れば悉く是れ接木と稱す

べし(挿木は生長緩慢なるを以て)而して是れが砧木に供用せらるゝものは一般に普通の野生薔薇を掘り取り來りて直ちに砧木とするにあり此野生薔薇は天然に發育したるものなるを以て其年數に長短ありまた太さにも形狀にも種々ありて殆んど千差萬別なり花戸は此砧木に就て形狀年數又は細大に論なく凡て之を用ゆるを常とせり蓋し實驗に依れば今日迄に吾人の知る薔薇の種類は其如何なる種類に論なく之を普通の野生薔薇の砧木に接木して活着の不良を認むるものは今日迄遭遇せざるの事實なり然れども將來に於ける苗木發育の狀況並に壽命の如何を取り調らぶるに於て種々なる事實に遭遇することも亦免れざる所たり花戸並らびに栽培家が今日迄で實驗上薔薇の砧木に就て少しく改良を加へたるものは漸やく數種に過ぎず則ち白黄美香登大山吹等の各種にして是等の種類は普通野生薔薇の砧木を用ひて接木するときは其當年に於ける活着力及發育の點共に異狀なしと雖も次年若しくは三年目位に至りては漸く衰狀を呈して發育不良に陥り遂に其種木は枯死するを普通とす然るに此の砧木を野生薔薇に代ゆるに「カウシンバラ」と稱する四季咲のものを砧木となすときは其壽命永きに涉り且つ將來に於ける發育の狀況も稍や佳良なりと云ふに在り余も亦之を認む然りと雖も薔薇種類の多き随つて其性質の同じからざる豈此の三種のみならん然るに其種類殊に性質の差異あるにも係らず

均しく是れ野生薔薇の砧木のみを用ゆるは決して其當を得たるものと云ふべからず  
 人或は云はん西洋に於ても薔薇各種に適用する砧木は野生薔薇のみと夫れ或は然らん然れども西洋に於ける野生薔薇と本邦に於ける野生薔薇とは其性質に於て均しからざるものあるべく亦苗木を作るにも長幹中幹短幹等仕立方の異なると共に各々之れに適應せる性質を有する砧木を選ばざるべからざるは勿論の事にして假令ば長幹仕立の砧木に最も適應せる砧木は彼の「ダニユーブ」河畔に生ずる一種の野生薔薇なるが如く若し夫れ仔細に研究したらんには更らに嶺新にして有益なる事實を發見するに至るべきは必然なるべしと思はる余が實驗は未だ年月を経ること少なく且つ區域小なるを以て敢て世を益するに足れる不變説として示すに足らざるべしと雖も茲に少しく概要の一端を記して敢て大方の參照に資せんとす  
 余が實驗せる薔薇の種類中野生薔薇を砧木として多年の間其生長の旺盛なる種類は數多し就中宇宙、王照君、錦の司、白天國香、香世界、緋の司、瑞寶、千里香、驪山の月、月世界、見鷲、紅牡丹、金光殿、櫻鏡、波渡家、一條紅、東天光、金冠、今玉藻、星月夜、麝香等に於て「カウシンバラ」の砧木を用ひて良好なる性質を現はすものは白黄、美香登、泰山白、七子遊、錦帶紅、都錦其他の數種なるが如し尙ほ蔓性の各種を木香若しくは波渡家に接換し

或は耕の司、寅の洞、瑤臺の夢其他強壯なる薔薇の各種を挿木して之れに弱性若しくは稍性質の似たるものを接換し宇宙、王照君等の如き強性の四季性のものを挿木して稍弱性の四季咲性のものを接換して其樹性の軟弱を幾分か矯正し得るや否やの試験をなせるが如きは目下試験中に屬するを以て他日に非らざれば之を公にする能はざるなり薔薇の栽培家並に薔薇の苗木を養成せんとするの士亦幸はひに他方面に渉れる百般の考試を應用せられなば蓋し意外の好成績を得らるゝことあるべし。(植物繁殖秘法の一節)

**切接法** 切接法は薔薇を接木するに當り、施術輕易且つ奏効確實なるを以て世上最も廣く行はるゝ方法である、今左に花戸専門家の説に聞き又自己の経験に徴し、稍詳細に此の方法に就て講述して見やうと思ふ。

切接を行ふべき砧木は、種類により、及び居接砧、堀上砧の二様に依つて差異がある、即ち居接砧に於ては其の勢力強きを以て、砧木は周り四分以上位の細きものにも此の方法を應用することが出来るけれども、堀上砧にありては、其の勢力前者よりも稍弱いから、従つて砧木も太く根も亦完全なものでなければならぬ、其の砧木の太さは周り一寸位より三寸内外までが最も適當して居る、蓋し適當なる砧木に接いで培養其の宜しきを得たる時は、只に其の生着力確實なるの

みならず、接穂と砧木との間に皮肉を生じて全く接目を蔽ひ、切口の腐敗する様な恐れがない、之を行ふには堀接にありては豫ねて假植しおきたる苗又は其の當日取りたる砧木(居接砧なれば一定植の圃地に存せるまゝ)を土際より五六分許り残して其の幹を鋸切り、断面は鋭利なる小刀を以て平滑に削る。

次に種穂は長さ二三寸位にして二三芽以上を有するものを銕にて切り取り、其の上端は利刀を以て鋭斜に切り、さて其の接ぐべき部分即ち下部は其の元の方を鋭利に切り、之に對したる裏の方を長さ一寸位に最も平滑に削るのであるが、其の際注意すべきは太陽に反對せる部、即ち陰を削り、削ると共に口中に入れておく、蓋し此の陰を削るは其の活着を良好ならしめん爲め、又それを口中に入れるは乾燥を防がん爲めである、而して之に對する砧木は成るべく其の表面の平らかにして傷なき所を選び、再び其の肉の所を薄く削つて之を除き、其の面を平滑にする、但し其の削るべき長さとは巾は、大低穂木の面よりも幾分か廣く且つ長くせねばならぬかくて砧木の準備全く成れば、前に拵へて口中に啣へておいた穂を挿し込み砧木と穂木との薄肉を隙間のないやうに能く合せ、砧木の皮を被せてから打葉を以て其の接いだ部分を下より強く捲き上げ、漸次上端に至るに随つて心持緩く緊縛し、更に接臘を塗抹しておけば一層完全である。



上述の如き方法に依つて接木した薔薇の苗は、これを床地に密植する、その植込方は穂は少しく頭を現す位の程度でよい、尙其の上二尺位の高さに葎簀を以て霜除日覆を作り、爾來砧芽に注意し發生するに従つて之を缺き取り、充分に生長し初めた頃を見計らつて曇天にはその葎簀を除き、日當りの強い時は之を蔽ひ、かく二三日の間習慣をつけて芽を強壯にし、然る後に全く葎簀を除かねばならぬ。

薔薇は他の花卉類に比して早接ぎであるから、往々霜害にかゝる恐れがある、故に一旦床接し花蕾の生じたる頃、之を別地に灰を撒布して適宜の距離に植出すがよい、灰を散布して肥料となすは、鬚根を急に生せしむること多き効能がある。

**囊接法** 此の法は砧木の皮裏に接穂を嵌入するもので、大なる砧木或は大木の枝又は老木の枝幹に接木法を行はんとする時用ひて利益ある施術法である、其の法は接穂を切ることを切接法の場合と同様にし、砧木も又切接法と同様にして平滑なる部分の皮は、利刀を以て幹に達するまでの七八分の長さに、縦傷をつけ薄き竹篋の類で其の傷の上端より皮を壓開して皮の裏の裏木質の間に入る様種穂を挿入すればよろしい、緊縛其の他は總て接木法と同様である。

**芽接法** 芽接とは母樹より其の發芽せんとする芽を皮の一部と共に持ち來つて、砧木の側ら

に接木するもので、種穂少き時又は皮肉の柔軟なる種類に用ふるに便利な方法である、之を行ふには砧木はその接ぐべき六七寸上より切りて枝一本を残し、種穂の芽を中央にして五六分位下より淺く剥ぎ取り、薄肉を去り、砧木の皮を丁字形に切つて皮を丁寧にし、之に接芽を挿して麻布又は打葉等で捲き、尙雨濕の入りざる様接臘を塗抹し置けば一層安全である。

かくて二三週間の後芽膨脹して既に生着の状を呈するを見れば、速かに麻布を取り除かねばならぬ。

此の法は砧木の外肉と、接芽の内側と親和生着して、接芽は其種穂にある時よりも、多くの營養分を得る、即ち接芽は先づ砧木、接芽の横截部より起るものである。

**接木用具** 以上の接木に要する器具は鋸、鋏、小刀等である。

(一) 鋸 は細目で堅實なる質のものを選ばねばならぬ、若し齒の粗いものなどを用ふると切断面は如何に苦心して平滑に削らんとするも、尙動もすれば傷痕を残すの憂があるから、注意して成るべく齒の細いものを用ふること。

(二) 鋏 は普通の木鋏でよいが細く柔らかな接穂を切る爲めには花鋏を用意すれば尙更よい、その刃の鋭利であるべきは勿論であるが、接穂を切断する場合には最も急速に行ひ、決して躊躇

踏巡逡、その穂を害する様なことがあつてはならぬ。

(三) 小刀 は普通に切出しと稱せらるゝもの、鋭利なものでよいが、用途により大小二通りを備へおき、大は砧木の削り方並に施術に用ふるものとを區別して少くとも二個を用意すべく、小は専ら穂木を削るに用ふる。

接木用品 接木を行ふ際に必要な器具類は上述の通りであるが、尙此の他に接紐、接臘等も必要なる用品である。

(一) 接紐 接穂を捲くに西洋では毛糸、麻又は木の皮の纖維などを用ひるが、我國では昔から麻油紙、萬年青の葉などを用ひたものである、併し以上のは各々一利一害があつて理想的のものとは云へない、それで今日では多くの専門家が特種の場合を除いては大低打糞を使用して居る、これ他の接紐が生着の後速かに取り除かないと其の局部に縊れ目を生ずるの憂あるに反して、打糞を用ふる時は接穂の生長するに従ひ、自然熱濕に逢ふて腐敗するの便あり即ち接穂の生長を害することなく又之を取り除くの手數も要しないからである。

(二) 接臘 接臘は接合部に雨水の浸入を防がんが爲めに塗抹する一種の藥品である、製法の種類も少くないが、茲には世上最も普通に行はれて居る製法を掲げる。

- 一、松脂 二十匁
- 一、蜜臘 十匁
- 一、獸脂 五匁

土鍋又は鐵鍋を火に架け、先づ松脂の適量を投じて之を溶かし、而して後他の二原料を入れて能く混和し、其の熱氣未だ去らざる中に太さ三四寸長さ適宜の棒を製し之を水中に浸しておいて用ふる、若し使用の際、餘り堅きに過ぐるときには之を暖めて用ひ、又手指に粘着するやうな場合には油類特に豚脂を手指に塗抹して之を取り扱えば右の如き憂を除くことが出来る。

#### 四、實 生 法

薔薇を種子によりて繁殖せしむる法は、餘り廣く行はれて居ない、少數の數奇者乃至は花戸に於て、各種の變種を得るために行はれて居る位にすぎぬ、併し經濟的觀念を離れての素人培養家にも、新種の育成又は花粉交接の人工媒助を行ふて得たる種子を播いて、新らしき珍品佳種を作り出すと云ふことは、頗る興味ある研究事項であらうと思ふ、今左に實生法の要點のみを簡單に述べやう。

先づ薔薇の完熟した種實を採收して、其の果肉を除き、種子は肥氣なき底土を混じて箱又は瓶

六八  
に入れ、之を土窖又は軒下等の土中に埋藏しておく、床地は早春二月中旬より下旬までに他のものと同様に作り、よく表土一二寸を篩ひ土となし、板にて少しく之を壓して後、種子を適宜に撒布し、之に土を被ふこと三四分尙其の上に藁を厚く蔽ひて過度の乾燥及び雨の爲めに種子の流失を防ぐ用となす、又薔薇は砂交りの地によく好適するものであるから、貴重な種子は之を砂中に蒔き温室内に於て灌水を怠らなければ、其の發生頗る良好である、但し砧木用として野生種の種子などを播下育成する場合には斯くの如き手数をかけるには及ばない。  
かくて發芽伸長するに至らば、除草と肥培とに注意して、秋季まで之を養ひ、十月頃に至りて掘り取り、根及び幹を共に適宜に切り詰めて之を別地に植出し、肥培よろしきを得れば、翌秋の砧木には頗る佳良のものたるを得るであらう。

人工媒助法

實生の方法は前述の通りであるが、年々、種々の變種を作り出さんとするには、唯普通に成熟した種子を蒔くばかりでは不可ない、前にも一言しておいたやうに、珍品佳種を得んとするには所謂人工媒助法を行はねばならぬ、これ最近進歩せる科學の餘澤であつて、最も興味あり又必要なる所作である。

先づ媒助用に供せんとする二種の花を撰擇し、その一は花將に開綻せんとする二三日前、徐ろ

に指頭を以て瓣を開き雄蕊を切り除いて亦舊の通りにしておくと二日乃至三日も経てば、其の花は自然に開花するであらう、開花すれば直に豫め用意しておいた臘引雁皮紙の袋を以てその花を被ひ外襲乃ち蟲類風等の媒介交接を防がねばならぬ

次に媒助用に供せんが爲めに撰擇しおける他の一つの花が開けば、その雄蕊の花粉を採りて、前者の紙袋を除き、その花の雌蕊に附着せしめる、その法花粉を有する花を接近せしめて、振盪落下せしむるもよし、又は毛筆の先端に花粉を集めてその柱頭に塗抹してもよい、要は花粉の交接を完全に遂行せしめさへすればよいのである、かくて此の操作首尾よく終れば、又舊の如くに袋を被せ、數日の後、受胎してから之を取り除いて花に標章を附けておく。

普通に行はるゝ人工媒助法の一般方法は略上述の通りである、即ち從來専ら蟲類又は風の作用に依つて遂行せられた不秩序な花粉の交接に委ねず、人力を以て選拔せる異花間の交接を規則的に且つ完全に營ましむるにある、斯の如くにして結實の後採集した種子は、翌年に至つて播下し、肥培管理に注意すれば、必ず所期の珍花を得ることが出来るものである。

## 第七章 手入れ法

七〇

薔薇の手入に就て注意すべきことも種々あるが、其の最も重要なものは、剪枝灌水の二法である。そこで、茲には専ら此の二法に就て詳述し、尙終りに手入れ一斑を附記して初心者参考供しやうと思ふ。

### 一、剪枝法

凡ての果樹花卉類に剪枝の必要なことは今更暇々するまでもないが、抑も薔薇栽培の目的が大豊麗なる花を得んことにありとすれば、層一層注意して之を行はねばならぬ、何となれば、其の枝條をして、長するがまゝ、はた伸びるがまゝに放任せんか、樹體內に於ける養液の徒費は、遂に花は小となり、色は艶を失ふに至らしむるからである。

然し、剪枝の目的は單に美大の花を得んが爲めばかりではない、樹容を整へると云ふことも亦一要件でなければならぬ、彼の窈窕花を欺くてふ絶世の佳人も、其の容姿陋しく、服装醜くかつたならば、如何ばかり其の美を傷け、その品格を損することであらう、それと同様の意味で、

花のみ如何に艶美を極むるも樹容之に伴はなかつたならば、眞に花の權威と美觀とを發揮することは出来ない、此の間の消息は、活花の法に於て最も八釜しく説いてあるが、余は又直に之を薔薇盆養の場合に移して以て、剪枝法の一秘訣となすべき價値があるものと信するに躊躇しない。

**剪枝季** 剪枝すべき時季は移植の際に於てなすのが最も良いとして、從來世に廣く行はれて居るが、種類の關係季咲の如何、培養の状態等に依つて一概に定めることは出来ない、併し大體に於て、四季咲のものは落花後、一季咲のものは十一月初旬乃至四月中旬を以てすればよいかと思ふ。

**剪枝部** 芽の肥大にして外部に向へるものは悉くこれを摘去し、樹容の全體より見て交錯せる枝條及び出所の面白くないもの等は成るべく之を剪枝せねばならぬ、若し又、多數の花を着生せしめんとする場合には、極めて纖弱な枝ばかりを剪み去り、稍太き枝は其の枝頭を少しばかり剪むに止めておけば、新梢は皆着生するに至るものである、併し此の方法は單に花蕾を多く着生せしむると云ふ効果あるのみで、薔薇栽培最終の目的たる美大の花を得るの道ではない、云はゞ只花いちめにすぎないのである。

### 蔓生種の剪枝

例へば金司香、香世界、金世界等の如き蔓性種及び發育強盛な種類は通例

その剪枝の必要がないとしてある、否寧ろその伸長性の自然に放任しておく方が、却つて好成績を見ることが多い、故に之等のものは只枯枝と贅枝との剪定に止めておいて、風通の便を計る位で充分である。

**盆栽の剪枝** 最初鉢に植えた時、各枝の三四節をのこして剪み込み、その節々より生ずる梢枝は、翌年より春秋の二季に、又その各三四節を残して之を剪除し、且つ冗雑なる枝を交又せる枝の一方などは、常に注意して之を剪み去るがよい、斯くの如く充分剪み込み、又蕾を生じた時、花の配置を豫め考へ一株に三輪乃至五輪の蕾を残じ、又は之を剪み去れば美大富艶の花を開かしむることが出来るとは某實驗家の談である。

**剪枝用品具** 剪枝用としては鉄でもよいが普通薄味の鋭利なる小刀を用ひて居る鉄を用ひても小刀を使つても、剪枝せんとする場合には逡巡遅疑せず、豫定の部分を一気に剪除せねばならぬ、若し之に反すれば切口の圓滑を缺くの不利を生ずるを以てである。

## 二、灌 水 法

灌水は薔薇の營養上最も必要なことであると同時に、栽培上最も注意すべき處作である、

今左に數項目の下にその大要を述べやう。

**灌水用の水** 灌水用の水として最も適良なのは雨水である、次には河水がよい、此の雨水や河水を得ることが出来ない場合には井水を用ふる、元來井水は餘り可くないけれども、今日培養家の毎日用ひて居る灌水用の水は概ね此の井水である、併し汲み立てのものをそのまゝ用ひては不可ない、汲み立ての冷水は樹根を害するからである故に井水を用ひんとする際には、二

三日前に之を汲みおき日光に晒らしてその温つたものを用ふるだけの手数をせねばならぬ。

**水の温度** 灌水用の水の温度は灌水時の空氣の暖度と略同じ位の暖かさにしたものを施せばよいのである、それで春夏秋冬は勿論、毎日々々氣温の變化につれて水の温度を更めねばならぬ譯であるが、實際はそれ程嚴密でなくともよい、要するに外氣の氣温と甚だしき差異なき程度

のものを用ふるべきである、即ち具體的に云へば、春夏の候に於ては朝に汲みし水を日光に晒らしおき正午前後に之を與へ、又秋冬の交は温湯の水を加へて華氏六十度位の温度にして用ふるが如き方法を以て灌水すべきである、只余のくれぐれも注意しておきたいのは盛夏炎暑の折、一時の涼味を食らわんが爲めに、腸胃を害するをも顧みず、濫りに冷水を喫するの愚を薔薇の灌水に於て敢てしはならぬことこれである。

**灌水の量** 灌水の分量は氣温晴雨、種土、排水の可否、鉢の大小、等に依つて各々異にせねばならぬもので、豫め一定しておくことは出来ぬが、又そこに適度と云ふものがある。

若しその灌水量の適度を誤まつて、分量多きに過ぎた結果あまりに、濕潤ならしむると、根部の腐敗を來す恐れがあり、又之に反して灌水量の不足、即ち乾燥に失せしむると、遂には枝葉凋落の患がある、即ち乾燥にすぎ濕潤に失しないやうに適度の灌水をなすことが最も肝要である。

七四

一例を挙げれば、開花中、生長盛なるの時は従つて水分を要することも多い、故に此の期に於ては乾燥に過ぎない程度の灌水をなし、又落花後次期の芽を葉腋に生ずる前後は、さまで多くの水分を要しない時であるから、枝葉の衰弱凋萎せざる範圍内に於て、寧ろ乾燥せしむるの方針を取るが如き注意を以てすれば、灌水の適度に近き結果を得るであらう。

**灌水の回数** 灌水の回数も亦分量と同じく種々の場合種々の事情によつて一定することは出来ない、即ち夏季風烈しくして著しく盆裏の土乾燥するが如き場合には時々一日二回乃至三回も灌水せねばならぬこともある、併し又冬期のある場合に於ては一週間に一二回位に止めておかねばならぬこともある、要するに灌水は豫め分量乃至回数を決しておかざるべきものではない

臨機應變に依つて機宜の處置をせねばならぬは勿論であるが、併しそは多くの經驗ある専門家に云ふべきことであつて、初心者には一定の灌水標準を示しておく必要がある。

**灌水の標準**

- 普通に世に知られて居る灌水の標準を示せば、
- 一、三月中旬から四月に至る間は二日隔に一回日中に於て灌水すること
  - 二、五月から九月に至る間は、毎日一回日中に於て灌水すること
  - 三、十月より十一月に至る間は二日隔に一回、日中に於て灌水すること
  - 四、十二月より翌年三月上旬に至る間は一週間毎に一回又は二回日中に灌水すること
- 以上は單にその一般標準にすぎないので、之を以て總ての場合に於ける金科玉條としてはならぬ、宜しく時と場合とによつて、それ／＼斟酌應用して乾濕共に兩極端に陥らざるやう深く留意することを忘れてはならぬ。

三、手入 一班

怠惰の學生が試験前になつて一生懸命に勉強するのと同様、培養家の多くが、發蕾より開花までは總ての保護手入も能く行き届いて、此の遺漏なからんことを期するが、さて花も萎み葉も落

ちつくす秋冬の頃になると、既う馥郁艷美の花容に心目を樂しましめた當時のことは夢のやうに忘れて了つて、又顧みないとまでは行かずとも、知らずくの間に入手の注意を怠ることは、往々誰にもあり勝ちのこと實にそれが人間の弱點である。

併し又來ん春の美花を望む人は、是非とも此の弱點を打破せねばならぬ、而して成年後有爲の人物たらしむるには、其の子女の幼時より常に充分家庭教育を施さねばならぬのと同じ理由で、薔薇も亦その開花期に豊艶な花を得んとするには、何うしてもその平素の手入注意が最も肝要である、此の意味に於て余は聊か手入の一斑に就き實驗家の實驗談を紹介して自他の参考にしやうと思ふ、即ち左に掲ぐるは、岩崎男爵家の園藝主任北村東紅氏の談である。

不●斷●の●手●入

總て花の咲て居る間は頻りに可愛がつてやりますが、散つて了ふと頗る不親切になります、誠に人間の勝手なものには呆れ返ります、併し薔薇は四季咲きのものが秋頃までは思ひ出した様に、時々二三輪づゝ咲きますのでまだ幾分の脈が残されます、それでも初夏の全盛期の様な譯には行きませんが、怠らず手入をしますと、やがて來ん花期には、艶麗な花を作ることが出来ます。

表●土●の●耕●耨

と云ふことは強ち薔薇にのみに限られては居ませんが、特に薔薇には必要を

感ずるやうに思はれます、五月初旬開花の初まる前に、少くとも一回表土を耕耨するが宜いのです、勿論根を損傷すると不可せんから、先づ二三寸の深さでよろしい、而して開花後七月頃までに二三回繰り返し、殊に強雨等の爲めに表土を叩かれた場合には適宜に乾燥するのを待つて直に耕耨をしますので、表土を軟かく分解すると云ふことは、薔薇栽培の最要點である様です。

砧●芽●を●缺●く

と云ふことは何でもないことで又誰でも知つて居ることであり乍ら兎角怠り勝ちになるのです、近來砧木として彼れがよいとか何が適して居るとか云つて甚しくなると砧木と接穂との關係におもきを置く結果なるべく同じ種類を砧木として接合せしめ様とします、其の結果が何うであるかと云ふことは不明であります、多くの場合砧芽を發見する事が困難の様です、普通砧木として用ひられる野薔薇は砧芽として發生した場合は直ぐに分りますが同じ種類のものでは一寸分りませんで此の不明は慥に失敗の基となる様です何れにせよ此の砧芽を缺くと云ふことは特に注意しなければなりません。

水●肥●を●施●す●事

は頗る必用です、西洋では一週間に半ガロン(約一升)の稀薄な水肥(半桶の牛糞を二三桶の水に浸けた位のものを)與へよと云つて居ります施肥の時機は殊に降雨前が良い様です、濃いのを稀に與へるよりも薄いのを再三與へる方が確に機能が多いのです。

灌水法 葉や莖へ頭から灌水してやるのは一方害蟲を驅除する方法にもなり又煤煙や塵埃の積つたのを洗ひ落すことが出来るので、試みにこれを行つたのと行らぬのとを比べて見ますと非常な差のあるのに驚かれます。

花を切る事 花は成るたけ枝に永く留めて置きたくありません、出来得れば毎日片端から切りたいのです、然し花枝の新莖は少くも一二芽を残して切つた方が可く若し切取らずに花を散らした場合には、同じ位に切り捨てるが宜い、而して挿花としては朝早く露の未だ乾かぬ中に半開の花を選んで切りますと永く保ちます。

薔の摘除 薔を摘除ると云ふことは一寸惜しい様であります但し花を得やうとしますれば止むを得ない事です、下手に之を惜しんで全局の美を失ふのは愚の極です、然し薔薔の様な一つの花叢を形成する種は其の儘にしておいた方が可いのです、通常三四の薔が抽出する中で中央部のものが最も強性でありますが形態の不完全なのが多く、これは適宜に選り出して残す外はない

施肥の困難 盛夏の候に表土へ牛糞に堆肥を敷き詰めますと、其の土壤を肥沃ならしめる計りか、常に土壤及根部を湿润らす効があることと云ふ事です、然しこれは庭園では到底行ひ難い事です、何故かと云へば其の發散する臭氣も劇しく第一見る眼も甚だ快くありませんから言ふ

### 第八章 仕立方

薔の仕立方——即ち培養の形式に就ては西洋に於ても、日本に於ても、古來一定の法則が設けられて居る、と云つて何も一から十までその法則その形式通りに仕立てねばならぬと云ふ理由もないが、培養の順序として一通り心得ておく必要はある、一通り心得ておいて、それから各個の長を敢り短を捨て、一新形式を案出するのにも興多からう、余は本書に於て屢々調和とか配置とか云ふ言葉を繰り返して培養上又は觀賞上頗る必要なことであると説いておいたが、茲に陳べんとする培養の形式所謂仕立方なるものも、要するに樹容花態の調和美を發揮せしめんが爲めの處作に外ならないのである。

元來薔は亞細亞の原産であるが、其の濃艶の花容馥郁の佳香がいたく西歐人の嗜好心に投じたので、愛養賞珍の結果其の培養に關する凡ての研究が東洋よりも歐米に於てより多く發達して居る、此の意味からして余は歐米の培養形式を先にし、然る後に日本從來の仕立方に言及して



見やうと思ふ。

### 一、歐米式

歐米諸國に於て行はるる培養の形式も、種々様々であるが、其最も重なるものを擧ぐれば、標準式、柱狀式、上昇式、叢生式の四法である。

**標準式** 蝙蝠傘を展いた様な形状——これが此の標準式を一言にて髣髴せしむる形容詞である、即ち尙詳しく言葉を変えて云へば、其の莖部を柄となし、傘の廣がつた所が枝葉となる様に仕立つる形式である、此の傘狀に生長することは薔薇元來の性情であるから、何も別段仕立つる必要には及ぶまいと思ふ人もあるかも知れないが、決して然うではない、何の手入れもせずに放任しておけば、形状頗る見苦しいものになつて了ふ、故に此の形式に仕立てんと思はゞ、或は頭部に展開し過ぎたる枝葉を摘除するとか、又は砧木の年稚くして最も強勢なものを選んで接木するとか、それ〴〵の手数をかけねばならぬ、尙標準式の中にも左の三種別がある。

- 矮性標準式 六寸乃至一尺五寸の高さのもの
- 半標準式 一尺五寸乃至三尺の高さのもの

普通標準式 三尺以上の高さのもの

**柱狀式** 柱の直立したるが如き形状——これ柱狀式の直覺観である。而して此の柱狀式に仕立てたるものは頗る美觀を呈するものである、左に野村農學士の著書より之が仕立方の一節を抄録して説明に代へやう。

此の形式を造らんには先づ底部の周圍一寸内外にして横に多くの小枝の限りたる落葉松等の如きものを二本立つべし、其の柱の長は、六寸ばかりのものを限度とす、其の下端は深く土中に埋めて、風其の他の障害のために容易に動かされざるやうになし置くべし。

かくて繁茂せる枝葉は充分に之を保護し、柱にからみ附け、尙繁茂する時は枝に枝をからまし、幹にからまして、前後左右透見することなからしむる様になる時は其の開花せるを見るに誠に美觀を呈するに至るべし。

柱狀式に造るには其成長の速かなるものにあつては、一年に之をなし得べしと雖も、否らざるものによりては、二年乃至三年を費すにあらざれば、これを完全すること能はず、故に他の形式によりて造れるものゝ如く、又は普通に栽培するものゝ如く、一年毎に植えかへ、又は接木すべきものにあらざれば、最初之を造らんとする時は、成るべく其の土質の良好なる場所を

撰擇し充分に肥料を施しおくべし。

**上昇式** 此の式に仕立つべき薔薇は、概む一季咲蔓性種、又は眞の野薔薇に過ぎないので、開花當時は觀賞の價値あるも、謝花後は葉落ち、枝現はれ、見る影もなき姿となつて了ふ、それかあらぬか、一時上昇式の流行した時代もあつたが、今日では薔薇培養家の多くが、此の形式に仕立つるものは殆どないといふ有様である。

**叢生式** 殊更に枝葉を繁茂せしめ、殊更に多數の開花をなさしめんとするのが即ち此の式の仕立方である、故に叢生式にせんとするには年々剪枝を行はず、只發育上必要の部分のみを切る位に止めておかねばならぬ、但し花の優劣大小などを眼中におくものは本式を行ふては不可ない

### 二、日 本 式

所謂日本式の仕立方は從來ありふれたるもので特に茲に説述する必要もあるまいと思ふが、只筆の序でとして名稱の下に少解を試みておくに止める。

**如意式** 此の式は鉢植にした薔薇の枝を長く盆外に垂らして、數條の瀑布地に落つるの形狀に擬して造る仕立方である。

如意式に造る適種のもの蔓生種のもので、左の品種は尤も好適しておるものである。

- 残星 乙女の袖 雪山香 旭の姿 千里香 朝霞 十二一重

**長幹式** 此の式は歐米式中の普通標準式に恰當すべき仕立方であつて、其の丈三尺乃至五尺、又はそれ以上のものとなすこともある。

長幹式に造るには一季咲種の方、四季咲種に比して適して居るが、又種類によりては、四季咲種も一季咲と同様の好果を擧げ得るものもある、兩種の重なるものは

- 一季咲種 七福神 香世界 紫玉 花榮香 大和錦 五大洲 一天四海
  - 四季咲種 宇宙 鶏冠 滿月 華寶殿 和合神 月世界 泰山白 錦帶紅
- 短幹式** 此の式は歐米式の叢生式と同様であつて畢竟するに、短き長幹式である、通常樹の長六七寸乃至二尺を以て限度とする。

### 第九章 驅 蟲 法

世間の諺に「箱入娘には蟲が付き易い」と云ふ、それとこれとは事變れど薔薇の花の馥郁たる芳香に憧れ、華麗なる花容を慕つて、花の褥に一夜の宿りを得んためか、甘き蜜の香をしるべに

接吻の露を吸んとてか、種々様々の蟲類が群集してくる、中には花と花との赤繩を結ぶ月下氷人たる粹な益蟲もあれど、肘鐵の恨——まさか然うでもあるまいが——多くはわが花の女王に仇なす害蟲輩である、いでや之からその害蟲輩の重なる奴原の習性形状を調べて驅除豫防の方法に取りかゝらう。

一、習性及防除法

(一) 綠蚜蟲 薔薇の害蟲の筆頭に數へらるゝ綠色の小蟲、見た所大したこともあるまいと思はるゝが、油斷大敵、その蕃殖力の大なること、侵害の甚たしきこと、實に恐るべきものがある、若しそれ發生を知り乍ら之が驅除を怠ることあらんか嫩莖や花蕾に群集して養液を吸ひ取るは勿論、遂には全樹の葉を喰ひ芽を侵し忽ちにして枯死せしむることは決して珍らしくない。

防除法

- 一、手袋をはめて指頭にて壓殺すること。
- 一、石油乳劑、除蟲菊浸出液を撒布すること。
- (二) 菊虎 此の蟲も前者に劣らず、大害を與ふるもので體軀一寸許り、斑猫に似て居るが全身

藍黑色を呈し前胸に赤條がある、薔薇を侵害するは重に此の蟲の幼蟲であつて、幹莖に喰入してその生育を妨げる。

防除法 被害の兆ある時は、樹幹を検して穴のあき居るや否やを、確めねばならぬ、若し幹に、穴あれば必ず此の蟲の喰入したるに相違ないので針金の先端を尖らして徐々にその穴より挿し込み、木髓中にある幼蟲を刺し殺すのが最も簡易有効の驅除法である。

(三) 鐮花娘子 體長四寸許り頭、胸、脚の莖部は皆黑色を帯び腹部は鮮黄色を呈して居る鋸蜂の一種である、幼蟲は光輝ある綠色のもので、物に恐れる時は巧に腹部を屈曲して葉上に附着して居る、而して主に此の幼蟲が薔薇の幼部を喰害するのである。

防除法 綠蚜蟲の場合と同様でよい。

(四) 姬黑落し文 體長一分五六厘光輝ある深黑色の象鼻蟲であつて薔薇の葉を葉柄から凡そ十分の二三を残して兩方より噛み切るの奇性がある、そしてその噛み切つたものはこれを、捲いて恰も落し文の様な状態になしその内に産卵する、これその名に因つて起る所以である。

防除法 手袋をはめて之を捕殺するが一等簡便な方法である。

(五) 貝殼蟲 此の蟲は多く老幹の幹枝に附着する黄白色の殼を被つて居る小蟲である、他の

八六  
蟲と聊かその趣を異にし、意地悪くも幹の養分の液汁を吸ひ取ることを唯一の侵害法として居るから、此の蟲に犯されると往々一夜の中に枯凋せしむる様なこともある。  
**防除法** 松脂合劑の撤布二硫化炭素瓦斯及び靑酸瓦斯の燻蒸が一番有効である、併し瓦斯燻蒸は使用上頗る危険であるから、素人は成るべく避けて簡易安全な方法によらねばならぬ。  
(五) ウメケムシ カナブシ、ウシカ等も薔薇の害虫であるが、其の被害の程度は前記五種に比して甚だ少いから、一々茲に述ぶる程でもない。但し防除法は如上各種のそれを適用すればよろしい。

### 二、驅除藥調製法

薔薇の害虫を驅除するに用ふる藥劑も種々あるが其の中で製法の簡単な割合に奏効の顯著なものを二三摘述する。

- 一、石油乳劑 石油石鹼の合劑即ち石油乳劑の製法は幾通りもあるが、先づその調合法の主なるもの二三種を左に掲げやう。  
(イ) 石油 五 升

- 洗滌石鹼 一斤半
- (ロ) 石油 五 升
- 軟水 二 斤
- (ハ) 石油 六 升
- 水 五 升
- ブランデー 二百 瓦
- 軟水 三 斤
- 水 二斗五升

是等の乳劑を製らへるには、先づ冷水の中に破碎したる石鹼を入れ、半日程放置して、充分石鹼を水で軟化せしめてから、加熱して溶解せしむるか、或は水を沸騰して置いて、其の中に破碎したる石鹼を入れ、徐々に長く攪拌するか、何れかの仕様によりて、石鹼を水に溶解せしめ、其の溶液の温度が下らぬ中に、徐々に攪拌しつつ、石油を加ふれば、白色の粘状物を得る、此の物質はそのまゝにて數日間放置するも分離する憂は殆どない、之を用ふる際には、再び能く攪拌し、適

量の温湯を加へて稍々之を稀釋し、更に冷水を加ふるのである、但し本劑調製上特に注意すべきことは、何分引火し易き石油を取扱ふ故、火に遠ざかりたる場所に於てすること及び兩方共温き間に能く混和して乳狀の液にすることである。

使用法

貝殼驅除の場合、此蟲の發生して未だ貝殼を生ぜざる頃、即ち六月中下旬に二三十倍の水を原液に加へて撒布すべく、蚜蟲驅除の場合、三十倍位の水に稀釋して用ふるがよい。

二、松脂合劑

(イ) 松	水	苛性曹達	脂
五斤	四斤	七合	五十斤
(ロ) 松	水	魚肝油	苛性曹達
五十斤	二十五斤	五斤	一斗

前法は三者を能く混合して十分に之を煮沸溶解せしめたるものに温湯一斗三四升を加へて貯藏しおき使用の際には、更に冷水を加へ、之を五倍に稀薄して用ふる、尤も樹幹等にあるものを驅除する際には之を稀釋する代りに、凡そ倍量の冷水を加へて直ちに塗抹用に供するがよい、後法も亦前法と同様にして、松脂、魚油、苛性曹達の三者を能く溶解し置きたるものに加熱したる水を加へるのである。

此の液は貝殼驅除には最も効力の著しいもので、又蚜蟲の驅除に用ひても効果の大なるものがある。

三、除蟲菊浸出液

除蟲菊	水
一匁二分	三升乃至四升

これを製するには先づ除蟲菊粉末を上記の量だけ一箇のコップに入れ、次に熱湯を注いで蓋をしたまゝ約十一時間放置しておいた後、右分量の水に混するのである、此の液は揮發性のものであるから時日を経るに従つて、自然とその効力を減じて来る、故に、成るべく使用せんとするその際に臨んで調製するやうにせねばならぬ。





熱湯を注いで生石灰の充分に粉碎するを待つて水を加へて全量一斗とする、右の如くして硫酸銅及生石灰を溶解して了つたならば、大桶の上に目の細かなる篩を置いて之を通して二液を同時に濾過してよく攪拌するのである、その混和液が即ち二斗式ボルドウ液である、但し製造上特に注意すべきことは

九四

- 一、桶には其の内面に 豫め五升 及 一斗毎に目盛をつけて、一々樹にて水を盛る手数を省く
  - 二、生石灰は良好なものでなければ不可ない。
  - 三、硫酸銅は工業用の安價なものを用品が經濟である。
  - 四、ボルドウ液製造に用ひる桶は、金屬製のものを選んで必ず木製のもので用ふること。
  - 五、ボルドウ液は、製造後數時間を経れば、沈澱を生じて効力を減ずるものであるから豫め生石灰液及び硫酸銅液を製造しておいて、必要の都度之を混和すればよろしい。
- 良好なるボルドウ液は薄糊の如き粘氣があつて、一二時間経つても上澄を生じない、若し粘氣少なく數時間後器底に沈澱を生ずる時は、生石灰の品質不良なる故硫酸銅に多量の遊離硫酸を含む有する爲めであるから、次の方法によりて、其の良否を鑑定して不良なる時は更に生石灰を追加せねばならぬ。

(一) 試験紙檢定法 良好なるボルドウ液は中性であつて、青色試験紙を浸すも變色しない、若し

赤色となるときは、試験紙の赤色を呈せしむるに至るまで石灰液を追加する。

(二) 小刀檢定法 能く研ぎたる小刀をボルドウ液に入れて攪拌し其小刀に銅鍍金を生じない時は

其のボルドウ液は良好なるものであるが、良し不良なる時は、小刀に銅鍍金を生ずるから、更に生ぜざるに至るまで生石灰を追加しなければならぬ。

**● 使用法** 此の液を撒布するには噴霧器又は如露を以てすべく、且つ此の液は幹莖葉枝等に撒布した後、雨水の爲めに洗ひ去らるゝものであるから、幾度も灌注する必要がある、よし又雨水の爲めに洗ひ去らるゝ様な事がなくとも、効力は十日乃至十五日位に過ぎぬものである、故に其の期日には又撒布することを忘れてはならぬ。

千度八千度とび繞る

蝶と薔薇はおもふどち

されど黄金の色なし

かれをめぐれり日の影も



誰と薔薇はおもふどち

われは知らまし知りてまし

歌ごえ絶えぬうぐひすか

黙だしはてたる夕つと

薔薇の心しらねども

われは愛せぬものぞなき

薔薇も蝶も日の影も

はた夕つとも鶯も (ハイチ)

花の薔薇栽培秘法終  
女王

附 録

世界薔薇観

此の一篇は文學士畔柳郁太郎氏が曾て時事新聞紙上に於て發表せられし玉稿である、薔薇と東西古今の文學詩人等との關係を説くこと頗る精密にして且つ趣味津津、一種薔薇世界史を讀むの感がある、即ち乞ふて本書の附録となし、巻尾の飾とする、螢的書冊の讀は喜んで受くるに躊躇しない(著者)

眉目俊秀なる青年が薔薇の花の冠りせるをゆび指して、彼方の畫工は五月の姿をキャンヴァスに載せてみたいのだと云ふ。

實に黄を競ひ紅を争ひ白を闘はず薔薇は、妝はざるに艶己に絶し、風無きに香自ら遠い趣がある。

全世界を包む花

薔薇の西洋名は亞刺比亞から希臘、羅馬を経て、英吉利、獨逸、佛蘭西、伊太利、和蘭、西班

牙、波蘭等夫れく、多少の訛りを受けながら西歐を包括して居るけれども敢て此花の本場が東洋に存在すると謂ふ意味ではない、新舊兩世界に跨つて諸威さへ常緑葉を着け美花を咲き芬香を放つて六月から十一月迄花期を保持するやうになるだらうと、リヴァス氏の言へるも無理はない

### 波斯の花

波斯は今も昔も殊に此花を愛づるので有名である、ペルセポリスにある古代彫刻に於て人物の頸の周圍に此の花が見え圓柱の腰線にも亦此花の修飾が見ゆるから立派に證據が擧がる、北亞米利加、堪察からベンガルと到る處に逢遭し得らるゝ而已ならず、今や人工移植の爲め南米や濠州の出店さへ本店を凌ぐ程の勢ひ凄じなると言ふも愚かなれど、殊に東洋に於て艶美を擅にして居ると謂ふことで亞刺比亞夜話の一都市の如く此花の香りに嘔ぶばかりの二大産地は實に北印度のウムリチルと歐羅巴土耳其のアドリアノオブルである。現に佛蘭西ばかりに三千餘種もあると喧傳せらるゝ豊富な薔薇も其の祖先は約三種で而かも悉く古人の知遇を辱なうして居たらしい。一はロオザツエンチフオリアと稱して勸察加東方の藪に野生するもの、一はロオザダマスツエナと稱しシリアの原生たるもの、一はロオザインヂカと稱して支那の薔薇たる月季花長春花なるも

の即ち是である實際薔薇の進化は目覺むるばかりで、モツスロオと思ふ。波斯と土耳其にては花全體を意味する言葉が殊に薔薇に適用せらるゝことが恰も日本に於て櫻に適用さるゝと同様であるから殆んど國華と見做し得る程度に嘆稱さるゝことが推測さるゝ上述べの關係は亞刺比亞語に於ても亦然りである、埃及は波斯程に薔薇は多くないけれども尙チユニス近傍に見るやうに野生もあつてバルバリ海岸などはなかなか夥しい、シリアは有名なるダマスツス薔薇を出したる國であることは敢て言ふ必要はないことである。

### 舊約聖書の花

舊約聖書に唯二回のみ記載せられたる薔薇と云ふものは果して薔薇であらうか否歟、邦譯聖書には雅歌第二章第一節「われはシャロンの野花、谷の百合花なり」とて、野花と知るされ以賽亞第卅五章第一節「荒野とuringるほひなき地とはたのしみ沙漠はよるこびて番紅の花のごとく咲きかゞやかん」として番紅と記されては居るが英譯聖書には共に薔薇といふ言葉があてはめてあるから一應調査する必要を生ずる、此の問題は古來種々なる議論を惹起したる有名なる折紙附きの問題であつて事實上薔薇はシリアに原生するから否定する理由は立たないけれどもヘブル語ハブハ

ツゼレスの語根たるバザルは亞刺比亞語バサルと同様に何か球根類を指示すると共に、今日シャロンの野に薔薇を見ないと云ふ旅客の實事とを考がへて、多分薔薇ではあるまいと云ふ説が一般に認識されてゐる、聖書字典に依憑すれば、或る論者はシャロンの野に夥しきサフランであらうと推測する、邦譯の根據は此處に存するらしい、或る論者はやはり同じくシャロンの野に豊富なる水仙であらうと推測する、是れは香氣高くしてパレスチナの住民に今尙賞美さるゝといふことである。或る論者はユデヤにチユウリップが多いから是れであらうと言ふ、最近にパレスチナを親しく旅行して昨年其所見を公にしたるテムブル嬢の書を繙ひて讀むに薔薇は約七種ばかりあつて變種をも合せると十一ばかりになるやうであるが、孰れも北方高地に限られ獨りフェニシア薔薇（ロオザ、フチアニチア）のみが開拓されたる地方に普ねく行き渡つて居ることになる。しかし聖書の薔薇には何等の關係をもつけかねるらしい。要之學者の研究が右の如くである以上は英譯聖書の所謂薔薇は偶々其の薔薇を尊重する風習に誘はれて不知不識陥りたる誤譯に歸因するものであらうと思ふ。

戀 愛 の 花

薔薇が東洋から希臘に傳つて這入つたものであるといふ證據は、ホオマアが此花を花として知らなかつた事實に輝して明白である。ホオマア時代の研究を一昨年發表したるエール大學セイモア教授の所説によると、座敷や身の周りに花を使用すると云ふことは此の時代には絶無であつた花の芬香果物の美味に言及したる個處ホオマアの作品中に見當らず薔薇と云ふ文字は、ヘクトルの屍體を腐蝕せざらしむるためにアフロヂデが塗抹したる香油の形容詞となつて附與せられたる事（イリアッド二十三の百八十六）、及び曉を形容するために「薔薇の指の」なる枕言葉となつて數々表れることだけである。

従つてホオマアは恐らくは東洋輸入の薔薇香水のみを知つて薔薇花其のものを知らずに居たものらしく推測せらるゝ。

ホオマアの年代は不明にして學者間に諸説紛々たるにもせよ、假りに最も古るき紀元前千〇五十年から最も新らしき紀元前八百五十年迄の間に据え置いて夫れから少し下つて大抵は紀元前四百七十八年死んだらうと思はれて居るアナクレオンに進んでみると其の他の希臘詩人に優つて、殊に薔薇花を愛好したる證歌を遺して居る、酒と婦人とに名高き此の詩人が一戀の花なる薔薇の花」と歌ひ「花の首の薔薇の花」と歌ひ「いとしき花の薔薇の花」と謠ふのは甚だ格好の様に思

惟一の、但しアナクレオンの所謂薔薇の花は今日の云ふ所の薔薇の花と同一物であらうといふ説が優秀である、果して然りとすれば戀の觀念と薔薇の觀念とを結合して「戀」が薔薇の間に眠り乍ら蜂に螫されたり或は「戀」が「歌」に捉へられて薔薇の花輪を頭に結ばれたりする趣意の歌は亞細亞に於ける當時の希臘人の聯想を描き出したるものらしい。叙情詩人を除いては古代希臘に於ては薔薇を愛好したる證據を擧げることが出来ないさうである、叙情詩人の間だけでは遠くはサツフオーやアナクレオンより近くは第三世紀頃のフィロストラッスに到る迄薔薇は戀愛と歡樂との象徴として使用し來たのであつて此餘勢は今日尙所存に起伏し盛衰する。

### 羅馬の花

羅馬人の所謂庭園は吾々の連想する庭園の如く綠樹高低し艶花參差し、石あり泉ある樂園の意味を有しては居らぬ、羅甸語のホルツスの希臘語から進化し來つて唯食物を培養する意味であるから寧ろ鳥と譯すべきものであらう。但し僅少なる範圍に於て花園の存在したる事實は紀元前百〇六年に産れ四十三年に死したるシセロの所言に徴して立證し得らるゝものであつて、彼の文句に依つて羅馬人の花園に薔薇と堇とが愛育せられ、就中薔薇は温室に入れて冬季にも賞觀し得る

様になつて居たことは明瞭である。同じく是等の事實について左券となるべき人で紀元二十三年に生れ七十九年に死したる有名なる自然科学者プリニイの所言に依れば羅馬人は薔薇と堇菜との外には花束用の花を庭園に移植したことはないさうである、彼の書に徴して十二種の薔薇が當時知られて居たることを推測せしむるけれども、今日園藝家が説くところと正反對の意見を叙述して居るから薔薇培養法は全々了解されずに居たものらしい。

### 贅澤の花

「薔薇の中に臥す」とか「薔薇の中に飲む」とか「薔薇の中に暮らす」とか言ふ言葉は羅馬に於ては贅澤に暮らすと同一義を所有する。加之、羅馬に於ては祭典其の他の儀式には必ず薔薇を使用した、今日佛蘭西で年々墓碑を花飾りする風習は昔羅馬時代の薔薇祭即ちロザリア又はロザレスエスカエとて薔薇を墓碑に修飾したる風習に起因すると云はれて居る、醫藥にさへ薔薇の根に花や種子や夫れく使用した事は他の植物と同様で、例へば一種野生の薔薇の根は狂犬に嚙まれたる傷を醫すとせられたものであるから、其の迷信が基礎となつて現に犬薔薇の名稱が存在する。

羅 甸 文 學 の 花

サイマンズの研究に依れば、羅甸文學中に二種の重要な觀察が包蔵されて居る一は紀元前八十七年に生れ四十九年に死んだとか思はるゝカッスルとて、古代伊太利亞の最大叙情詩人と稱せらるゝ作歌の婚禮の歌である。文句を辿つて讀んで行くに薔薇と銘うつてはないけれども、庭園に圍まれて勤に傷けられず家畜に食れず、風と雨と日とに撫育せられて咲く花を青春の男女は共に羨しく思へども、情知らずの手に摘まれて色褪せ果つれば男も羨しく思はず女も羨しく思はず云々と書いてある、此詩句に句はしてある處女の純潔に對する象徴は誰れ教へたるわけもなく、後の作家の本能が不知不識薔薇の名譽に捧げて仕舞つた、他は紀元三百〇九年に生れて三百九十二年に死し半は異教を奉じ半は基督教を奉じたるアウソニウスの挽歌である、彼は古代文運の大切に出で、中世紀に現はれ近代文運に溢るゝ精神、別言すれば自然と情調を同うして果敢なきものゝ哀れを感じる心を表彰した。

従つて彼薔薇其ものを生けるものとして之と相親み、花は彼に取つて決して尋常一様の記號たるにとゞまらなくなつた。歌はかなりに長篇であるが、懐しげなる目を舉げて自然を忠實に觀

薔 薇 の 紅 顔

測してゐる趣があり、映する「春の旦、紫だちたる空より又新たに夜明けの冷氣を吐きて、輕風の私語を聞けば起きて朝の快さを味へといふ、(中略)薔薇の花の眞紅に燃え出でんとするもの、傲氣に花瓣を一つ一つ數へて緑の衣を横に押しつけたるもの、輝くばかりなる盃を擲げて黄金の密線を示すもの、扱ては暫らく炎の花を燃せるが今は疲れて頭を垂れ、色蒼ざめて恥を帯ぶるもの——白駒の歩み徒らに早くして生るゝ薔薇あり老ひ行く薔薇ある様を深く思ひ沈めり、斯く言ふうちにも眞紅の冠せる花落ちて其の光榮を地上に散しぬ(中略)乙女子よ、薔薇の花咲きて若き内に摘み玉へ、摘みながらお身にも亦斯くこそ時の飛び行くものと心し玉へ、歌の大體はまづ斯うあつて、薔薇の命の短かきを想やりて人の身の上に及ぼし美しき薔薇の果敢ないことを極言したる最初の歌である。アナクレオン風の詩人ならば落ち花でさへ、なほ其の香ひを考ふべきところであらう、以上二種の薔薇觀は文藝復興の後、歐羅巴全洲に瀰漫して夥だしき詩人が彼處にも此處にも種々な綫を織りながら其の意味を傳達して居る。

希臘羅馬の古文學に於いては薔薇を果敢なき人生の象徴に使用しなかつたと云ふものゝ尙多少

の補足すべき點がある、ホオマアやヴァデルが戦争に若武者の死るゝを描くにあたつて好みて撫子やハヤシンスやオリーヴの枝の離るゝことに譬へて居るが、是れは美しきものゝ短かさを象徴するのでなくして、美しきものゝ卒然として思ひ懸けなき折りに消失することだけを比較するのである、然るに世目的にすら、薔薇を採用したる詩人はなかつた、尤も紀元前三世紀頃に榮えたるシイオクリタスが「美しき薔薇の花、時のまに／＼消えて行く、美しき春莖榮程なく色は褪むるなり、扱て美しき若うどよ、されば盛りは短くて」(アイデル二十三の二十九)と歌ひたることを、紀元前四十三年に生れて紀元後十九年に死んだらしいオオウイッドが、恐らくは此の句を記憶せるがまゝに「永久には咲かじ百合莖榮、刺は鋭し薔薇の蔭、斯くこそ若うど白髪生ひて、嫉み深き時皺を刻む、と歌ひたることは榮え短き薔薇と驅け去る如き紅顔とを比較したるものと見做すべきであらう。但しシイオクリタスの句は所作であるまいとの學者の説がある。

薔薇と少女

十五世紀に入つて文運の進歩を見ると共に、復興期を代表すると稱しても差支なき特性なる自然に對しての清新なる興味と中世紀傳來の憂鬱と相集つてアウソニウスに向つたのは毫も怪しむ

に足りない。ロオレンゾオ、デメチチのコリントオには少しく加減してあるが大抵行き方は同様であつて、或る朝、色々に咲き狂へる薔薇の或るものは既に散りて艶もなき花瓣が大地に萎せるを眺め、若き者仇なりと觀して「さらば乙女よ心して早月に薔薇を摘み玉へ」と結んである。此の結局はアウソニウスの結句を再現したので、夫れが復興期の戀歌に瀰満して又反響を興へて居る、ロオンゾオと相並んでポリチアノオも亦同一の源泉より同一の詩想を掬ひ來つて「早月半ばの晴れの日に園を歩みぬや乙女」と繰返々々合唱しながら遂に「薔薇の香りの失せぬ間に、摘みて樂しめ乙女子よ」と結ぶ調子迄も眞似て居る。但し兩者共に薔薇が少女に對して青春の期を失せざるやうに教ゆるものとして未だ一層森嚴なるカフスルの比喻を使用して居ない。其の是れあるは十六世紀の半少し以前に死したるアリオストオのオルランドウ、フユリオソオの一ノ四十二、三であつて讀み行くに従つて言ひまわしかたの順序が甚だ似通ふのに氣付く。同じく十六世紀半ば少し以後に死したるタツソオはゲルサレムメ、リベラタの十六の十五に於いて主としてアウソニウスの趣旨を敷衍すると共にカツルスの一部をも借りて居る「唯だ一日に斯く花は、人の短かき盛りさへ、四月の空は歸へるとも花は咲くまじ人も亦一の節はカツルス式であらうと信する。尙又グアリニとて千六百十二年に死したる伊太利亞詩人は、其の傑作と稱せらるゝバ

ストル、フイドオに於て女主人公アマリリと獵人シルヴィオとの間の許嫁期が長きに失するを見  
てアマリリの父が不安の思ひを抱くあたりを描くにあたりて、矢張り上述四家の手を経て傳來  
せる薔薇を取扱ひ、且つ次の様な意味を述べて居る。薔薇の花と謂ふものは、縦しや之を摘取ら  
ぬにもせよ、太陽の光線に烈しく射返されるときは日没と共に凋落して了ふ、少女も亦斯の如く  
母が充分注意に注意を拂うて居るにも拘らず、想ひありげな目から凝視されて居ることに不圖氣  
がつくと、戀風が身に泌みて羞かしいので物こそ言はぬ、戀わづらひに苦しみ抜きて舞て枯れて  
死んで仕舞ふ様になる。

### 薔薇と英國

薔薇に關して希臘羅馬の古文學から流れ出づる潮の跡を歐羅巴各國に辿り下るなどの大問題は  
到底自分等凡情の遂行し得らるべき事業ではない。英吉利一國だけであつても、若しも忠實なる  
調査を目的とするならば、終日書齋に閉居して研究しても恐らくは一年のうち薔薇の歌の調査は  
扱て置き之を讀了するさへすこぶる怪しいものだと思ふ。

英吉利を昔呼び做したるアルピオン島の語原は、多分南方海岸に峙つ白色の絶壁に基因するの

であらうと謂はれて居るが、アリニイは此の島に豊富なる白色の薔薇から生じたものではあるまい  
かとの説を立て、居る、夫れか、あらぬか兎も角も英吉利と薔薇との關係は酷く深遠にして、中  
世紀に於て少許の花を培養するうちのひとつとして既に薔薇の存在を認めて居た、今日到る處に  
逢遭し得らるゝ如く壁にはい上り庭にはびこり籬に纏るやうのことは無いけれども尙城砦の片隅  
に植えられたものである。

フツカアの所言に依れば亞種を問題外に置きて英吉利種は十九あると。

### 薔薇と沙翁

スペインサアのフェアリイ、クイーン二ノ十二ノ七十四、五はタツソオを手本として其の結句に  
「盛りの薔薇を摘み玉へ、衰ふる日の近ければ、後れに摘め戀ひの薔薇思ふ同志の覺めぬ間に」  
と歌ふて居るミルトンは古典に堪能なる學者であるため例へば失樂園中薔薇を使用した箇所四  
ノ六百九十七と七百七十一及び九ノ四百二十五等を参照して見るに孰れも希臘想らしく思はれる  
アダム及びイーヴが樂園の薔薇に圍繞せられて、恰も歡樂の盃を滿引するが如く薔薇の花の色  
褪せて散る所は即ち歡樂の夢破れて悲哀の初る所である、エベオン河に沿ひて籬に咲き小路に笑

ふ薔薇に親しみ深かりしものと見えて沙翁の所作には薔薇の記載が最も頻繁であつて、一寸數へたるだけでも五六十箇處もあるが、大抵は美しく愛らしきものゝ象徴として使用してあるから先づは希臘思潮を鍊り合せたるものとして差支はあるまい。例せばハムレットの三ノ四ノ四十二に於て皇子が母皇后を諫むる言葉に「斯かるお振舞ひこそ無垢なる愛の顔より薔薇を盗みて」とある、同じく三ノ一ノ百六十に於て狂へる皇子を見送りたるオフィリア姫の獨言に「御國の杖柱とも薔薇ともあらう御方が」とある同じく四ノ五ノ百五十五に於てレニアチイズが妹オフィリア姫の變り果たる狂態を眺めて「お、彌生の薔薇のいとしき乙女」と言へる悉く其生ける例證である薔薇水や薔薇菓子とは別問題として薔薇を耳飾りにしたり靴飾りにしたる風習も彼の劇の此處彼處に現はれて居るが、歴史的實事として著名なる例のヨオク家ランカスタア家の紋所たる紅白薔薇の事は顯理六世上中下を参照するがよい。ハアリツクの「得べくば薔薇を摘み給へ」には立派に前述の趣旨が現はれて居るが、尙ほ短歌一篇にシイオクリタスから借り來れる詩想が次の様にでゝいる「薔薇莖菜、零れ果つべき時もあれ、斯くぞおん身も衰ゆれ」サア、ウオルター、スコットが「露を浴びたる薔薇の花、涙に匂ふ戀ごゝろ」は矢張り希臘に於ける薔薇と戀愛を今様に染め直したものに過ぎまい、ママンズの「薔薇の歌」も人生を通じて嫁入り時から墓門に到る迄の

思ひ出多き此の花をブライダル、ロイヤル、ロオズと稱して、希臘時代の種々なる使用法に相當してゐるトマス、モオアが曉の色を薔薇にて染めたる様に言へるは、遠くホオマアと相應するし、カメルが愛の始めて生れたる時に春は満地に薔薇の花園を作つて之を迎へたといふのも希臘想である。ダンテ、ガブリエール、ロオゼツチは歌ふらく「露けき朝に薔薇の言ふ、美しけれどいとしきは、茨のすなる故ぞかし」此の考は稍やめづらしいかと思ふ。

### 薔薇と宗教

若し夫れ薔薇觀を詳細に調査して其の發達の跡をたどらうとするならば、仲々上述の如き粗笨な叙述では勿論足らない。

第一夥しき傳説神話が附着して居る、例せばアドオニスアポロの血液から此の花が生えたことや美の神たる、ヅイイナス沈黙の神たるハルボクラチイズとの關係や乃至ナイチンゲール鳥が刺にさされて鳴音優しき話や夫々に相當の意味がある、殊にナイチンゲール鳥と薔薇との關係の如き古くは印度詩人、波斯詩人より既に詩想の材料となつて英吉利に波及し傳承されて居るのである、夫れから薔薇を材料として諺や成句にも皆それゝ意味がある。例せば薔薇の下にか「薔薇が



咲いたとか「薔薇が閉ぢた」とか「君は薔薇を語つた」とかの類である。尙ほ又宗教と關係して詩觀の主要なる一部を構成する意味も排外することは出来ぬ、例へば舊教に於ては此の花をマリヤに配せる類即ちこれである、殊に純詩觀として存在し或る種類の薔薇に纏繞する意味は一層然るべき筈である、例せば質素といふ意味を有して籬を一面に飾る犬薔薇が、芬香を放つて所在の詩人に賞讃さるゝ類である。然し乍ら今は大局を觀察して重要な絲筋竹を手繰りよせ、細鱗はドシ／＼逸し去つてもせめては吞舟の魚を捕足して置かうと云ふに過ぎないのである。

### 薔薇と人生

既に大體に於いて大過なからしむるならば、薔薇の代表地とも見るべき印度歐羅巴系統の諸洲にあつて、薔薇觀は如何なる發達をなし來つた乎と云ふ問題には解答が與へられたることゝなる戀と云ふ名目の下に兩性共有の觀念から進みて女性のうちの少女に迄到つたならば、夫れだけ意味が制約されて従つて觀念は分化したるわけだ、戀の歡樂なれば管能的のものであるが、處女の純潔ならば越管能的で精神的のもので道德的のものである、これが區々たる處女の純潔のみに止まらずして進んで生死の問題を暗示するものとすれば、倫理學を出で、純正哲學に這入つたと

でも批評し得べきことゝなる、薔薇を對象として人生觀の類別は現代及び後代の西洋文學にあつて如何に發展し行くであらうか、是は頗る興味ある問題であらうと思ふ。

### 薔薇と支那

友人矢部理學士多年北京にあり歸つて人に語る所を聞けば薔薇には優等のものなく一種黃刺梅と稱して黄色單瓣の花をつくるものを賞美するが、それと共に紅色重瓣にして芳香強烈なる玫瑰を盛んに栽培して食物や酒類に花瓣を浸して香を添へる風習がある。と現代に於ける此の觀察は書冊を涉獵して結論し得たる過去の狀況と比較して多少の相違はあるが、大なる衝突は發見し得ない、支那にあつての薔薇觀の發達は自然の順序を履んで居る。

### 酴醾とは何物

宋人の絶重したる酴醾とは何物なるやを今茲に知ることができぬ、詩詞に多く用ひらるゝ文字は粉面又は額黄或は香瓊或は香雪等であるが、讀み去り讀み來つて冥想すると晩春の季に蔓狀をなして白花若しくは黃花をつけ芳香殊に佳なるものあつて酴醾支那人向にでき上つて居る事が朦

靡げに分る、唐制に侍臣學士を召し櫻桃を食ひ醪酒を飲といふ事實があるから芳香を酒に浸して快しとしたものであらうが本體は花疏に云へるが如く白花の木香花（ロオザ、バンクシアエ）であらう乎、夫れならば南方から舶來するのが當然であるから詩人の文句に見るが如く所在に醪架を作つて春季花時毎に客を招ねぎ宴を開くは誇張に失する、或は茶靡花（ルブス、ロジフロリウス、變種コロナリウス）であらう乎、夫れなればイチゴの方面に轉歩しなければならぬ、孰にしても羣芳譜に所謂「二三月間爛漫可觀盛開時折置書冊中冬取搜鬢猶有余香」が眞に宋時の醪と言説するや否やは不明の問題として永續するより外に詮方ない、宋の宋祁は蜀に醪多し黃者時々あれども香は白色よりも減すると記載して居る、韓維の句に「平生爲愛此香濃」とか「花中最後吐奇香」とかある意味即ち春晚に開く花の匂ひ愛たきさまを言ひ做せる句は隨處に逢遭することが出来る。例せば蘇軾の「醪不爭春、寂寞開最晚」司馬光の「春老醪香」陸游の「桃李擅春事、醪爲之殿」など即ち之である月夜に配する美觀を述べて謝堯仁は「花要帶月看、香要和露收」とし程敦厚は「素月共成中夜色、好風分散四隣香」とし盧元贊は「姑射真人玉骨香、淡月微風惜良夜」として居る、蔓性を示す句は蘇轍の「猗猗翠蔓長」や、黃庭堅の「倚蘭偷舞白霓裳」や楊萬里の「亂走長條柔可束」や共に好例であらう。但し全體としての醪に景觀并びに美

觀を知るに梅堯臣の「京師三月醪開、高架交垂自爲洞、素蕊層々紫蕊香釀、歸光綠春生瓮」も朱淑眞の「花神未許春歸去、故遣仙姿殿衆芳、白玉體輕蟾魄瑩、素紗囊薄麝臍香、夢思洛浦嬋娟態、愁記瑤臺淡淨粧、勾引詩人清絕處、一枝和雨在東牆」も共に充分なる材料を供給するが、特に蘇轍が「蜀中醪生如積、開落春風山寂々、已憐香掩曖、猶愛末開光的礫、半垂野水弱如墜、直上長松勇無敵、風中娜娜應數丈、月下煌々眞一色、故園問道開愈繁、老人自恨歸無日（下略）」と歌ひ進み所佳句の最上なるものであらうと思ふ。

薔薇と醪

醪に擬せらるゝ程も貴重なる木香とは何であらうか。瓶史に「牡丹以玫瑰薔薇木香爲婢」と書せられ支那に於て華中の華と稱せらるゝ牡丹の婢たり従たる木香は「今皆從外國來」であつて所謂「菊番諸國皆有」であるから人の熟知する處とならざる筈であるけれども、今人又呼一種薔薇爲木香愈亂眞矣」の理由のために、縦しや此の文字が頻繁に行はるゝにしても又敢て怪しむを順わないのである、但し詩人の立場から見れば木香なる文字に特別の面白味がない以上は、寧ろ詩美の聯想多き醪若しくは薔薇を歌ふ方が興趣豊なる筈であるから木香としての獨立詩句は

おのづから滅殺さるゝことゝなる。

唐の岑参曰く「移根自遠方、種得在僧房、六月花新吐、三春荒已長、抽莖高錫杖、引影到繩牀、只爲能除病、傾心向藥王」青木香の叢を詠んだものであらうけれども特性が發揮されぬ故、毫も珍しく思へない。唯だ時季が後れて六月になると云ふことだけ新しいけれども、瓶史月表に「三月花客郷木香」とあり花曆に「四月木香上升」とあるから時季を一定することはできぬ。宋の如積曰く「仙子霓裳曳紺霞、瓊姬仍坐碧雲車、唯知十日春歸去、獨有春風在慎家」是れは晩春に咲くことを示すのみである。劉敞の粉刺叢鬪野芳、春風搖曳不成行、只因愛學宮裝樣、分得梅花一半香」にて佳香を偲ばせ晁詠之の「朱籬高檻俯幽芳露、浥煙霏慾褪妝、月冷素娥偏有態、夜寒青女不禁香（下略）にて月の配合を歌ふて居るが、張舜民の「廣寒宮闕玉樓臺、露裏移根月裏栽、品格雖同香氣俗、如何却共牡丹開」にて却つて叱責される様な始末であるから、木香の地位は甚だ望ましくない位置である、詩觀としては醜態若しくは薔薇の地位に移動するのを至當とする。

支那も薔薇が中心

婢のうちに玫瑰（ロオザ、ルゴサ）が算入されて居た花蔬は「色媚而香甚」と書かれ、羣芳譜

に「灌生細葉多刺類薔薇莖短花又類薔薇色淡紫青蠶黃蕊瓣末白嬌艶芬馥有香有色堪入茶入酒入蜜」と載つて居るので、支那現代の習慣を説明するに足るけれども詩觀としては木香の場合と同じく、一層詩趣豊なる薔薇に比せらるゝに過ぎぬ作例も甚だ貧少である。

唐の唐彦謙が「麝炷騰清燎、鮫紗覆綠蒙、官妝臨曉日、錦段落東風、無力春烟裏、多愁暮雨中、不知何事意、深淺兩般紅」も宋の楊萬里が「非關月季姓名同、不與薔薇譜牒通、接葉連枝千萬萬、綠、一花兩色淺深紅、風流各自騰脂格、雨露何私造化工、別有國香收不得、詩人與入水沈中」も花の方面から稍々特色を發揮する様なところがあるが、一般の薔薇を歌ふものと見做しても毫も差支ない。

況んや唐の徐殷が「芳菲移自足王臺、最似薔薇好並栽」と明の陳淳が「清香凝紫玉、何必數薔薇」との如く共に明瞭に薔薇を中心として之に比較する證句があるから、更に進みて其薔薇の如何に觀察さるゝかを一應調査しなければならぬ。

薔薇と漢詩

花疏に「五色薔薇俱可種而黃薔薇爲最貴易蕃亦易敗」とあり、本草綱目に「薔薇野生林壑間春

抽嫩蕚小兒掐去皮刺食之既長則成叢似蔓而莖硬多刺小葉尖薄有細齒四五日開花（中略）人家栽玩者莖粗葉大延長數丈花亦厚大有白黃紅紫數色花最大者名佛見笑小者名木香皆艷可人（下略）」とあり、羣芳譜「薔薇藤身叢生莖青多刺（中略）黃薔薇色蜜花大韻雅態嬌紫莖修條繁夥可愛薔薇上品也（中略）白薔薇類玫瑰（中略）開時連春接夏清馥可人結屏甚佳別有野薔薇號野客雪白粉紅香更郁烈（下略）とあるので、黄色薔薇を最佳となして野薔薇（ロオザ、ムルチフロラ）に至る迄四五月の頃一切薔薇の清香を愛づる模様か明かに推測さるゝ、梁の簡文帝先づ歌ふて曰く「燕來枝益軟、風飄花轉光、氤氳不肯去、還來階上香」、是れでは生暖るき晩春の風に傳つて來る咽ぶが如き香を嗅ぐ心地がする、元帝の「倡女倦春閨」も柳惲の「春閨不能靜、開匣埋門妃」も薔薇の花自ら飛び香已に亂るゝを眺むるに先ちて現はるゝか、若しくは後れて起るか、孰れにもせよ兩者相離れず相伴ふ以上は、如何にしても薔薇の濃艶を夢想せずには居られない、唐の白居易の作詩に「移根易地莫憔悴、野外庭前一種春、小府無妻空寂寞、花開將爾當夫人」といふがあり、孟郊の作詩に「蜀色庶可比、楚叢亦應無、醉紅不自力、狂艷如索扶、麗蕊惜未掃、宛枝長更紆、何人是花候、詩老強相呼」といふがある。枝條撓み易く花姿媚ぶるが如く見ゆればこそ、前者の第四句後者の第三四句を生んだので方干の一緝難相似畫難真、明媚鮮妍絕比倫、露壓般條方到地、

風吹艷色欲燒春（下略）第二句及び第四句も同一系統の内に入るべきである。黄薔薇は粧ひ淡くして張新の「並占東風一種香、爲嫌脂粉學姚黃、饒他姊妹多相妬、總是輪君淺淡妝」となり、野薔薇は香薄くして姜特立の「擬花無品格、在野有光輝、香薄當初夏、陰濃蔽夕暉（下略）」となる、藤身叢生にして張谷山の「可惜茶糜都過了、繞籬猶自有薔薇」の如く、趙蔗境の「薔薇野生難拘束、過了鄰家屋上紅」の如くなれど猶ほ唐の儲光義は全體としての景觀を穩に描いて居る曰く「鼻々長數尋、青々不作林、一莖獨秀當庭心、數枝分作滿庭陰、春日遲々欲將半、庭影離々正堪玩、枝上嬌鶯不畏人、葉底飛蛾自相亂、秦家女兒愛芳菲、畫眉相伴菜蔬畦、高處紅鬚欲就手、低邊綠刺已牽衣、葡萄架上朝光滿、揚柳園中暝鳥飛、連袂踏歌從此去、風吹香氣逐人歸」。

長 春 花

野薔薇の變種にして「花小而一萼十花」なる十姊妹（ブラチフィラ）に殊に七朶一萼の七姊妹は僅かに明の楊基の如き人によつて歌はるゝに過ぎないから、残るは四季咲として持嚙さるゝ月季花別名長春花（ロオザ、インジカ）のみである。

俗名を月々紅といふが如く四時絶えざる所を重んじて、處々の人家に多く之を栽植し、莖青く

蔓長く葉は薔薇よりも小さく大抵赤い、宋の韓琦の作「牡丹殊絶委春風、露菊蕭疎怨晚叢、何似此花榮艷足、四時長放淺深紅」に於ては結句が即ち眼目であつて此の花の特兆を賞讃して居る、徐積の「誰言造物無偏處、獨遣春光住此中、葉裏深藏雲外碧、枝頭常借日邊紅、曾陪桃李開時雨、仍伴梧桐落後風、費儘主人歌與酒、不教閒却賣花翁」に於て第二、五、六句が同一の意味を述べて居る。

明の劉綸が「綠刺含烟籜、紅苞逐月開、朝華抽曲沼、夕蕊壓芳臺、能鬪霜前菊、還迎雪裏梅、踏歌春岸上、幾度醉金杯」の第二句、張新が「一番花信一番新、半屬東風半屬塵、惟有此花不厭一年常占四時春」の轉句、又共に同一の意味に外ならぬ。其他、楊萬里の「只道花然十日紅、此花無日不春風」でも、張舜民の「四時不絶花」でも矢張り同一の特兆を稱へて居るのである。

### 宋時代に始る

偕て、斯して見ると、支那の薔薇観は梁、唐殊に主として宋時代より始るから比較的新しくあると言ねばならぬ、新しいものには興味ある傳説神話の苔蒸す暇間がない上に、多くの場合に

於て重要な桃李若くは牡丹のなす如く作家の人生觀に參與して歌はるゝといふやうな機會はない、但し薔薇、木香、餘馨を通じて黄花と芳香とを昔に劣らす今も猶嘆賞する以上は、他日園藝の道大いに開けて支那人士の温室に西洋船載の艷美双びな薔薇が欲する儘の色と香とを與ふるとき、或は一躍して薔薇観が牡丹觀、芍藥觀の壘を壓する程に發達しないとも限らない、誰も此の推測を頭から否定することはできぬ。玫瑰の淺淺二色も無理に探したたる特點であつて別に面白くもないから無論薔薇観中に没入してしまつたらう、長春の四季咲も恐らく同一運命を免れることはできまい、花熊花色花香に於いて秀でざる花が四時絶え間なく咲いても、あまり感心すべきことではなからう、聯想美がない場合には特にさうである。

### 薔薇と日本

香薄く品格なしとて顧みられざる野薔薇で始まれる我國の薔薇観は如何に之を利用し來れるであらうか。日本にあつて「いばら」と謂ふは刺のある小さき木を總稱する時もあるし、或は又薔薇を指すこともあるが、茲には野薔薇若しくは薔薇と思惟さるゝ個所だけを驗べてみやう引き立ぬものを無理に誇張する必要はないから引立たぬ儘に使つて何か或る心地ちを匂はする、

萬葉集卷十六「枳棘原薊除倉將立尿遠麻禮櫛造刀自同卷廿「美知乃倍乃宇萬良能宇禮爾波保麻米乃可良麻流伎美乎波可禮加由加牟」では未だ何等の心持ちを傳へる處はないけれども、俳句の方へ移つて行くと之が低く咲き淡く匂ひて、何處からともなく田舎の風光がちらついて見ゆる「花いばら故郷の道に似たるかな」(蕪村)、「道絶えて香にせまりさくいばらかな」(蕪村)、「道のべの低き匂ひや花茨」(召波)、「古里は西も東も茨の花」(一茶)、「茨の花此處をまたげと咲きにけり」(一茶)、「乃至」裏道は關よりこはし花茨(知夕)、「茨咲きて山田に水の通ひけり(翠兄)、「馬の子の面ふり行くや花茨(龜選)」などいづれもさうであらう。但し刺があるので困るが垣に作る利用法もあり「袖かけて子供の泣くや花茨(五明)、「針ありと蝶に知らせん花茨(乙由)、「さほる人の無くて茨の盛かな(何狂)、「こと／＼し茨の花垣誰が家ぞ(保吉)、「茨垣犬が上手にもぐりけり(一茶)」

過去に薔薇なし

家に植うるは樹小さけれど花美しく香高き薔薇であるから、相應に人をたのしませたものと思ゆる。

榮華物語や源平盛衰記に階前薔薇の夏待ち顔に咲けるさまをかいであるが、なほ枕草紙に「さうびはちかくて枝の様などはむづかしけれど、おかし雨などはれ行たる水のつらくろきのはしなどのつらにみだれさきたる夕ばへ」源氏物語に「はしのもとのおさうび、けしきばかり咲きて、春秋の花ざかりよりもしめやかにおかしき程なるに」とかゝれて、枝の様を除けば、けしきばかり咲きたる花や亂れ咲きたる花をよしと見たることが知れぬ。西洋船載の薔薇幾百種今や到る處の庭園を飾りたて、高低大小意の儘に、枝も面白く花もたわしに香は三國一の敢て肩をならぶるものが無い。日本に於ける薔薇は過去に於て見るべき薔薇が無かつたと、共に日本に於ける薔薇観も過去に於ては見るべき薔薇観が無かつた。薔薇観の見るべきものは將に今後に於てあるべき筈である。

明治子の子規は「満圓の緑や薔薇の二三輪」伐りこみし薔薇に蕾みの多きかな」と初夏の景色に望み多き薔薇を賞めながらなほ「薔薇の香の紛々として眠られず」と口説ひて居る以上は、彼も流石に過去の人かなと嘆ずる人が多いだらう。頭に挿す薔薇の簪、顔を洗ふ薔薇の水、齒を磨く薔薇の粉——薔薇の香にねむられずどころか薔薇の香に寝られると共に薔薇の香に眠らんと欲する時勢の發達、眞に愕くべきものがあるから

薔薇觀の發達も亦眞に愕くべきものがなければならぬ、香に飽くものは香に別れ、香に飢うるものは香に慕ひ寄る。彼れ一步此れ一步斯くて薔薇觀は發達する。斯くて世界は發達する。(完)

千度八千度とび繞る

蝶と薔薇はおもふどち

されど黄金の色なして

かれをめぐれり日の影も

誰と薔薇はおもふどち

われは知らまし知りてまし

歌ごえ絶えぬうぐいすか

黙だしはてたる夕づゝか

薔薇の心しらねども

われは愛せぬものぞなき

薔薇も蝶も日のかげも

はた夕づゝもうぐいすも

(ハイチ)

附 錄 世 界 薔 薇 觀 終











終

